

ジャック・ストロー「三幕・笑劇」

サマセット・モーム 作

(田原 創 訳)

登場人物

ジャック・ストロー

パーカー||ジェニングズ氏

パーカー||ジェニングズ夫人

ビンセント（パーカー||ジェニングズ夫妻の息子）

エセル（パーカー||ジェニングズ夫妻の娘）

アンブローズ・ホーランド

ウオンリー夫人

セルロ卿

エイドリアン・フォン・ブレマー伯爵（ポメラニア国の大使）

ホートン・ウィザーズ

ウィザーズ夫人（ホートン・ウィザーズの妻）

ルイス・アボット牧師

ロージー・アボット（ルイス・アボット牧師の妻）

グラント・バビロン・ホテルのボーイたちと、チェシアにあるパーカー||ジェニングズ家の屋敷、タバナーの召使たち

時…一九〇五年

第一幕

グラント・バビロン・ホテルのラウンジと温室内の庭。ヤシの葉と花であふれており、たくさんの小さなテーブルのそれぞれを二、三脚の椅子が囲んでいる。数人が座ってコーヒーやリキュールを飲んでいる。レストランに通じる一続きの階段が後方にあり、鉛入りガラスの間仕切りとスイングドアとで庭と隔てられている。レストランではバンドが演奏している。

二、三人のボーイが辺りに立ったり客に應對したりしている。アンブローズ・ホーランドとウォンリー夫人がレストランから出てくる。アンブローズ・ホーランドは三十五の身なりのよいエレガントな男である。ウォンリー夫人は年齢不詳の美しい未亡人である。

ウォンリー夫人 「階段の一番下で立ち止まって」どこに座りましょうか？

ホーランド 安心しておしゃべりできるように隅っこにしましょう。

ウォンリー夫人 ばかな！ 人知れず顔を赤らめるためにグラント・バビロンに来たんじゃないのよ。ランチの間にはたくさんの人を見掛けたけど、その人たちだって今にわたしを見掛けるだろうと覚悟してるわ。

ホーランド 僕はすこぶる女性に親切ですから、あなたしか目に入りません。

ウォンリー夫人 「一つのテーブルを指差しながら」あそこに座りましょうか？

ホーランド あっちに座っちゃいけませんか？ ボーイが友達なもんで。

ウォンリー夫人 「座りながら」何て変わった友達をお持ちだこと。

ホーランド おい、君。

ボーイ 「応じて」一分で伺います、お客様。

ホーランド 「ウォンリー夫人に向かって」あのね、僕はとてもたくさんの場所を渡り歩いてきましたから、世界のあらゆる町にあらゆる階級の友達がいるんです。

ウォンリー夫人 あなた、パーカー・ジェニングズ夫妻を見たでしょ？ わたしたち

から三つ目のテーブルに座っていたわ。

ホーランド 見ました。

ウォンリー夫人 あたしが入ってきたとき、奥さんがわたしを知らないふりしたのをご存じかしら？

ホーランド パーカー・ジェニングズ夫人がお高くとまるようになってきたって、以前から僕はあなたに言ってきました。

ウォンリー夫人 でも、ねえ、アンブローズ、生意気にもわたしを知らないふりするなんて……。

ホーランド 「微笑みながら」だから、僕は彼女を尊敬するんです。

ウォンリー夫人 恐れ入ったわ。

ホーランド それは大して彼女の感性のせいではなくて、間違いなく彼女の知性のたまものだと思いますね。昨今は、かつて思っていたほど爵位を持つことが全く上流社会へ入るいい方法ではないことに、彼女は気がついたんです。

彼女は、あなたがひどく貧乏なのを知っていますし、上流社会では、貧乏人が極めて当然のように知り合いの全部から嫌われて軽蔑されるのを知っています。

ウォンリー夫人 そうね、でも、状況を考えてちょうだい。五年前、パークー||ジェニングズ夫妻は上流社会に一人も知り合いがいなかったわ。それまでずっとブリクストンに住んでいたんですもの。

ホーランド 当時、あの二人はボブ・ジェニングズ夫妻と呼ばれていたという噂を聞いたことがあります——全然スマートじゃありませんよね？

ウォンリー夫人 ご亭主は毎朝片手に黒い鞆を、もう一方の手に傘を持ってシテイーに通ったものよ。

ホーランド いまいますしいボーイめ、来ないかな。

ウォンリー夫人 ある日、あの二人が何となく遺産をもらえると思っていた北部のおじさんが突然死んで、二人に二百万ポンド近くを遺したのよ。

ホーランド おじさんの選び方で非常についている人はいるものです。

ウォンリー夫人 おじさんは金物製造業者で、あのご亭主がその財産の十分の一をもらうなんて誰も思っていなかったわ。わたしがスイスであの二人に出くわしたら、あの人たち、家を探してたのよ。

ホーランド それで、親切心がわいたから、あなたは彼らを田舎のタバナーに招いて、彼らは二十一年あそこを借りているんだ。

ウォンリー夫人 わたしは田舎のみんなに二人を紹介したわ。あの人たちがみんなに会えるように、ちよつとしたパーティーを何度も開いたのよ。それが今になって、どうでしょう、あの女はわたしを無視するんだから。

ホーランド 「そっけなく」あなたはあの善良な人たちとの関係を話す中で大事な点を忘れてますよ。

ウォンリー夫人 そうかしら？

ホーランド 「微笑みながら」彼らがタバナーを借りたとき、法外な家賃を払うのに同意したことを言い忘れてますよ。

ウォンリー夫人 あの人たちはそれを払うことができたわ。それに、あそこは由緒のある場所ですもの。どんな目に遭っても構わないだけの価値があるわ。

ホーランド パーカー||ジェニングズは非常な俗物かもしれないませんが、パークレーンとエルサレムの間のどこにでもいるような抜け目のない男です。

ウォンリー夫人 あなたが言ってるようなことはちつとも思い浮かばないわ。

ホーランド そうですか？ じゃあ、それなら、あえて言いますけど、パークー||ジェニングズ氏があなたにあんな法外な家賃を払ったのなら、それは何か考えがあつたことだったんですよ。彼が賢明にも気がついたのは、チェシアに一生住んでも知り合いなんか一人もできっこないってことです。彼があなたとの契約書にそれを入れたとは思いませんが、僕がそれほど間違っ

てなければ、あなたがみんなを呼ぶという条件だけで、彼はあなたの屋敷を借りたんです。

ウォンリー夫人 「ちよつと間を置いて」わたしは住宅ローンで身動きが執れなくて、息子たちをイートンに行かせなければならなかったのよ。

ホーランド いや、あなたを責めているんじゃないやありません。あなたがジェニングズ夫人を自分の友達に紹介したとしても、それは感情的な事柄というより、むしろ事務的な事柄だったということを指摘したいだけなんです。

ウォンリー夫人 「ちよつと笑って」あなたは、あの人が自分が上るのに使ったはしごをけ飛ばしたのは極めて当然だと思ってるんですよ。

ボーイがホーランドのところにやって来る。

ボーイ(ジャック・ストロー) はい、お客様。

ホーランド コーヒーを二つとベネディクティン(フランス産リキュール的一种)を二つ。ところで、君はいつものボーイじゃないね。ピエールはどうしたんだ？

ボーイ 「そつなく」親戚のばあさんの葬式に行っております、お客様。

ホーランドはさつと目を上げて、戸惑いがちに見つめる。

ホーランド 君の顔を知ってる気がする。どこかで会ったかな？

ボーイ 「にっこりして」アンブローズ・ホーランド様ですよ。

ホーランド ジャック・ストローじゃないか！ 一体、ここで何をやってるんだ？

ジャック・ストロー ねえ君、グラント・バビロン・ホテルのボーイの制服を着ていまして、オックスフォード大学の教授のガウンを着ていますのに劣らず哲学者でいることは可能でございます。

ウォンリー夫人 「笑いながら」あのボーイ、あなたのことを「ねえ君」だなんて、随分変わってるわ。

ホーランド 何という偶然なんだ！

ウォンリー夫人 あなたのお友達が誰なのか、どうか教えてちょうだい。

ホーランド 全然心当たりがありませんね。

ウォンリー夫人 ねえアンブローズったら。

ホーランド 初めて会ったのはアメリカでした。僕が経済的な問題をたくさん抱えていた頃で——今から三、四年前のことですが——僕は旅行会社とちよつとした関係がありました。ジャック・ストローはその社員で、僕たちは大の仲良しになりました。

ウォンリー夫人 それが名前なの？

ホーランド そうだって、言っていました。

ウォンリー夫人 とても本当とは思えないわね。

ホーランド 全く。僕はジャック・ストローは追いはぎかなんかで、本当の名前はハムステッドのサブに連れてやったんだと信じています。

ウォンリー夫人 非凡な人に違いないわ。

ホーランド そうですね。僕が一番感服しているのが彼の自信なのか才覚なのかは分かりません。僕が船で戻ってくるまでの二年間、彼と一緒に過ごしました。二人で一緒にかなりつらい目に遭いましたが、彼は強力な支えでした。困難が生じて、彼が乗り越えられる分だけしか生じないことになっているかのように思えました。

ウォンリー夫人 本当にすごい人みたいね。

ホーランド 彼と一緒に生活して一番困るのは、息つく暇がないことです。彼は冒険好きが抑えきれないんです。順調だと彼は死ぬほど退屈で、再三再四、僕たちが何とか荒海を抜け出して静かな海に辿り着こうとするとときに、彼は当てのない目的のためにすべてを投げ出そうとしたんです。

ウォンリー夫人 でも、誰の身内なの？

ホーランド 神のみぞ知ります。英語はうまいけど、イギリス人でないのは確かです。

ウォンリー夫人 紳士だっていうの？

ホーランド 僕に言えるのは、彼はどんな世界にいても全く気楽にしているってことだけです。

ウォンリー夫人 多分、それは紳士の定義としては悪くないわね。

ホーランド 彼は水夫をやったことがあるし、ニューヨークでバーテンをやったことも、カナダ太平洋鉄道の機関士をやったこともあります。彼は鉱夫で金産地のクロンダイクに精通していたことがあるし、テキサスの牧場で働いていたこともあります。そして、彼が今ボーイをやっているなら、多分来週はオルガン弾きをやっているでしょうし、その次の週には会社でも作っているでしょう。僕は彼の手の届くところに大金があるのを六回も目の当たりにしましたが、彼は金に全く無頓着なものだから、全部逃してしまいました。

ウォレリー夫人 あの人がコーヒーを持って来たわ。

ジャック・ストローがコーヒーとリキュールを持って入って来る。

ホーランド 君のユーモアのセンスに大いに受けると確信できなければ、僕が君に給仕させることには当惑するところだね。

ジャック・ストロー お客様がわたくしにチップを下さるのに躊躇されるのは当然だと思います。わたくしは即座に何のわだかまりもなくチップをいただけると思いません。と申し上げられます。

ホーランド 教えてくれてありがとう。いくらかな？

ジャック・ストロー コーヒーが二シリング、リキュールが三シリングでございます。

このお値段はわたくしにはべらぼうだと存じますが、皆様、お連れ様にヨ

ーロッパで最高のホテルにいらっしやることをお見せするという名誉のためにお支払いになるおつもりに違いございません。

ホーランド 「コインを下に置いて」釣りはいいよ。

ジャック・ストロー 半ポンド（当時は五シリング）でございますね。ねえ君、お客様がわたくしに五シリングもチップをお出しになりますと、不当にもお客様はわたくしたちが昔からの知り合いだということに付け込むことになり  
ます。

ホーランド 「途方に暮れて」それは失礼。

ジャック・ストロー わたくしはサービスに対する十分な報酬として一シリングだけ  
いただいて、四シリングをお返しいたします。

ホーランド 君が謙虚なのは参るね。

ジャック・ストロー 「タバコを口にくわえたウォンリー夫人に向かって」火でござ  
いますか、お客様？

ホーランド 君に座ってもらいたいんだが。

ジャック・ストロー それは実にあるまじきことでございます。それに、ほかのお席  
もお世話しなければなりませんので。ですが、今晚ほかにお約束がなければ、  
喜んで夕食をご一緒させていただきますが。

ホーランド それは結構だ。でも、この仕事はいいのかね？……こちらはストロー  
君で——こちらはウォンリー夫人だ。

ジャック・ストロー 「会釈しながら」初めまして。こちらの仕事は午後の間だけで  
ございます。ご存じのように、下層階級は親戚のばあさんの葬式が得意で  
ございますから。

ウォンリー夫人 下層階級の方たちが母方のお祖母さんを埋葬する敬虔さを感じる  
ことは度々ですわ。

ジャック・ストロー ピエールは、わたくしの昔からの知り合いでして、ソーホーの  
卵輸入業者の寡婦で非常に立派な人物であるお婆の葬式に参列したかった  
みたいです。

ジャック・ストロー ボーイ長がとてもいい奴でして、自分にも女の親戚がいるもの  
ですから、代わりが見つければあれがいなくても大目に見てやると約束し  
たんです。ピエールはわたくしみたいにいささか特徴のある体格でして、  
彼の制服を着られる人間が見つかりませんでした。彼から困っていること  
を打ち明けられまして、彼の制服がわたくしにぴったり合うのが分かって  
いましたから、わたくしはすぐに言ってやったんです——代わりをやって  
やるってね。

ホーランド 今見ている君の仕事が金に困った状況のせいでないかと聞いてほつとした  
よ。

ジャック・ストロー お客様の早合点は残念なことです。わたくしははなはだ金に困  
っている状況でございます。申し訳ありませんが、ほかのお客様がわた  
くしの受け持ちの席にお着きになろうとしてらっしゃいます。

それまでに、客たちが続々とレストランから下りて来てあちこの席に着いている。ボーイたちは客にコーヒーを手渡している。ホー  
トン・ウィザーズとウィザーズ夫人がルイス・アボット牧師とアボ  
ット夫人（ロージー）を伴って下りて来る。ジャック・ストローは  
ホーランドとウォンリー夫人の席を離れてほかの客の世話をする。

ウォンリー夫人

ウィザーズ夫妻が来たわ。あら、ロージーとご亭主が一緒よ。

ウォンリー夫人は立ち上がってウィザーズ夫妻の方へ向かって行く。  
夫妻は誠実で気取らない人たちで、気品はないが親切で思いやりが  
ある。ルイス・アボットは格好のいい率直な若い牧師である。ロー  
ジーはとてもかわいくてきゃしゃである。地味な服装をしている。

ウォンリー夫人

「ロージーに微笑みかけて」ねえ、こんな悪の巣窟で何をしている  
の？ あなたに会うなんて驚きだわ。それに、ルイスまで！

ウォンリー夫人は彼らに会ったのを見るからに喜んで握手する。

ウィザーズ

僕たちはこの二人を連れてロンドンにちよつと遊びに来たんです。

ホーランド

みんな、僕たちの席に座りませんか？ 十分空いてますから。

ウィザーズ

それはご親切に。「妻に向かって」ファニー、ホーランドさんは知ってる  
よね。

ウィザーズ夫人

ええ、もちろん知ってるわ。こんにちは、ウォンリー夫人。

ウォンリー夫人

こんにちは。さあ、あなたたち若い方はわたしをはさんで座って、  
タバナーのことをすっかり話してくれなきゃ。

ロージー

そうねえ、わたしたち、あそこではとても楽しかったわ。すべてが美しく  
て、あの家がすっかり気に入りました。

ウォンリー夫人

あなたはホーランドさん知らないわよね。アンブローズ、こちらは  
ロージーといつて、ジャスパール・ネビルのお嬢さんよ。彼のことはよく  
ご存じでしょ？

ホーランド

もちろん、知ってるよ。

ウォンリー夫人

で、こちらはロージーのご亭主で、我がタバナーの新しい教区牧師  
なの。

アボット

そう言われると、とても厳肅な気持ちになります。

ウォンリー夫人

わたしは二人とも大好きなの。だから、あなたも好きにならなきゃ。  
この人たちは結婚するのを待ち続けていたわ。ルイスはある恐ろしくみす  
ぼらしい郊外の副牧師で聖人君子だったの。

アボット

僕のことをそんな大げさに言わないでください。

ウォンリー夫人

そんなことないわ。この人は聖人君子よ。でも、クリケットはやる  
けど苦行用のシャツは着ない、今風の素敵ないタイプの聖人君子だわね。当



然、びた一文持っていないロージーと結婚することはできなかったけど、神様が助けに来て、インフルエンザで我が教区の老牧師の命を奪ったのよ。

ロージー 何て恐ろしいことをおっしゃるの、ウォンリー夫人。

ウォンリー夫人 聖職禄を与える権利はわたしにあるのよ。だから、この人たちに上げたの。それで、この人たちは今あそこにいるのよ。

ロージー あなたはわたしたちによくしてくださいました。

ウォンリー夫人 あのね、わたしが今までに知り合った中で、あなたたちは唯一本当によい人たちのよ。イートン校に行くまでは、息子たちがそうだと思うたものだけど、今やあの子たちは悪魔だつて分かるの。

ウィザーズ あなたにはすっかりお世話になりっぱなしで、ウォンリー夫人。教区のみんなが感謝しています。

アボット みなさん気持ちのいい方で、みんなでわたしたちのためにやりやすくしようとしてくれます。

ウィザーズ夫人 何しろ、この人たちだったら、精一杯働こうとするから、二、三日ロンドンに出て来るようになかなか説得できなかったくらいなのよ。

ウィザーズ 多分、わたしたちがタバナーの近くに小さな屋敷を買ったのはお聞き及びでしょう。

ホーランド 昼食の時にウォンリー夫人が話してくれました。

ウォンリー夫人 「ロージーに向かつて」それで、あなたはロンドンを楽しんでるの？

ロージー もう、素晴らしいとしか言いようがありません。わたしたちにとってグラッド・バビロンに来ることがどんなに嬉しいことか、お分かりにはなりませんわ。とても洗練された気持ちにさせられます。それに、今夜はお祭りに行くことになっていますの。

ウォンリー夫人 「ウィザーズに向かつて」この若い人たちによくしてくださいさつてあげよう。

ウィザーズ夫人 二人がすべてのことを楽しんでいる様子を見るのは、わたしたちにとっても喜びですもの。

ロージー パーカー||ジェニングズ夫妻がここにいらっしやるのをご存じ？ 素敵じゃない？ わたしたちを見たら、驚くわよね、ルイス？

ウィザーズ夫人 「ちよつと鼻を鳴らして」マリア・ジェニングズが貴族を連れてくるわ。

ホーランド セルロですよ？ 僕も彼がいるのに気がついていました。

ウィザーズ あの人たちがエセルのために彼を捕まえようとしているのはご存じですよ？

ウォンリー夫人 まあ！

ウィザーズ夫人 「肩をすくめて」あの人が侯爵であればそれで十分。マリア・ジェニングズにとつて、あとのことはどうでもいいのよ。

ウォンリー夫人 エセルがあの人を相手にしないといいんだけど。

ロージー あの子はかわいいわよね？ わたしはとても好きだわ。ルイスに一途なのよ。

ウォンリー夫人 あなただったら、誰に対しても悪くは言わないのね？

ローズ 「笑って」めったに。皆さんとても素敵なんですよ。

ウォンリー夫人 そうなると、話しがしにくくなるわ。でも、エセルは魅力的な子だし、あの恥さらしの若い放蕩者の手に落ちて欲しくはないわね。

ウィザーズ夫人 あの子はあの家族の中で、お金で考えを曲げたことがない唯一の人間なのよ。

ウォンリー夫人 もちろん、あなたはジェニングズ夫人が今みたいに高貴になる前のことをご存じよね。

ウィザーズ夫人 それはもう、あの人とはずっと知り合いですもの。一緒にブリクストン高校に行きましたし、あの人の結婚式ではわたしが花嫁の付添人をやったくらいです。もちろん、一日中お互いの家を行ったり来たりしたものですわ。

ウィザーズ それが今は、どうでしょう、あの人はわたしたちを見ようとしません。アボット あの人はタバナーの人々から好かれていないんじゃないかと思いますが、わたしたちにはできるだけのことをしてくれましたし、二人ともすごく親切ですよ。

ロージー あの人のことで何か言う人がいてもわたしは気にしないわ。わたしにはすごく親切にしてくれましたもの。わたしが行きたい時には、いつでもお屋敷に来ていと言ってくださったから、わたしはいつもあそこで昼食を食べるためにぶらっと寄るんです。

ウォンリー夫人 あら、そう、あの人たちがあなたたちによくしているのなら、大目に見るわ。ジェニングズ夫人はずっとわたしを知らんぷりしてきたけど、まくいかなかったってことね。

ロージー あら、見て、伯爵だわ。

気品のある老人がレストランを出て、ゆっくりと階段を下りて来る。

ウォンリー夫人 エイドリアン・フォン・ブレマーだわ。一体どうしてあの人を知ってるの？

ロージー 知りませんが、チェシアにお屋敷を借りていて、一度教会に見えました。

ウォンリー夫人 ポメラニア大使なのよ。

ウィザーズ夫人 顔はよく知っているわ。

ウォンリー夫人 わたしたちのところに話しをしに来てくれるといいんだけど。あの人にルイスを紹介したいのよ。

ホーランド 彼は全然目が見えてないんだ。僕たちが見えるとは思えないね。

その間に、フォン・ブレマーは思慮深げに片メガネをかけていて、出て来ながら周りを見ている。ウォンリー夫人を見かけて、微笑みながら、近づいて来る。

フォン・ブレマー　ご機嫌よう。

ホーランド　ちょうどお帰りになるところのようでしたね。

フォン・ブレマー　そうです。レストランでコーヒーを飲みまして。

ウォンリー夫人　ポメラニアで何か目新しいことがありましたでしょうか？

フォン・ブレマー　皇帝閣下が老け込まれたこと以外は何も。昨今の家庭内の問題で参っておられて。

ウォンリー夫人　お気の毒に。

ホーランド　セバスチャン大公の噂を耳にしませんか？

フォン・ブレマー　そうですね。捜索をあきらめました。

ホーランド　「ウォンリー夫人に向かつて」あの事件を覚えてますよね？　家庭内でいさかいがあつて、セバスチャン大公の姿が突然見えなくなり——もう、四年になりますよね？——それ以来音沙汰がないんですよ。実に跡形もなく消えてしまったんです。

フォン・ブレマー　クリスマスごとに、皇帝は大公から手紙をもらっています。手紙は世界の様々な場所から送られてきて、元気で楽しくやっていると書いてあります。

ウォンリー夫人　すぐロマンチックなこと。一体どうしていらっしゃるのかしら。

フォン・ブレマー　神様だけがご存じです。

ウォンリー夫人　教えてくださいね、この前ランチの時に会いたあの素敵な若い大使館員はどうしていらっしゃいますの？

フォン・ブレマー　あの素敵な若い大使館員はろくでもないことになりました。ポメラニアに返さなければならぬことになりました。

ウォンリー夫人　本当ですか？

フォン・ブレマー　それがいさか面白い話です。ここに爵位が大好きなアメリカ女性がいらつしゃいまして、ある日あの大使館員はその女性に自分の召使を何々伯爵だと言つて紹介することを思いついたのです。もちろんその女性には興味津々で、すぐその召使を夕食に誘いました。やがてその話がわたしの耳に入りました。実際問題、大使館員にそのような悪ふざけをさせておく訳にはいきませんので、本国に返しました。

ウォンリー夫人　面白いそう、とても素敵だったのに。

フォン・ブレマー　では、失礼。

ウォンリー夫人　そうだった、アボットさんをご紹介しますかしら？

タバナーの新しい教区牧師ですの。そして、こちらがアボット夫人。よくして差し上げてくださらなければ。

フォン・ブレマー　お会いできて嬉しいです。教区での素晴らしい仕事ぶりは伺っております。

アボット　そう言っていたら、ありがとうございます。

フォン・ブレマー　「ロージーに向かつて」よろしければ、チェシアに行った時に伺いたいのですが。

ロージー　お会いできたら嬉しいですわ。

フォン・ブレマー では、失礼。

フォン・ブレマーは会釈して出て行く。

ロージー 訪ねてくださるなんて素敵じゃない？ あの方はどこへもいらっしやらないのよ。

ウィザーズ 伯爵があなたに会うことになっていたのをジェニングズ夫人が聞いた時の顔が見えるようだね。

ホーランド どうしてそんなこと言うんですか？

ウィザーズ夫人 伯爵は田舎であの人たちのお隣に住んでらっしゃって、あの人たちは伯爵とお知り合いになるために八方手を尽くしてきたんですけど、伯爵は全くあの人たちを相手にしようとしません。伯爵がマリアを訪ねて行ったら、あの人には目でも差し出すでしょうね。

ロージー あの人のことで、どうしてそんなひどいことが言えるのかしら！

最後の二、三のセリフの間に、パーカー||ジェニングズ夫妻が階段を下りて来る。エセル、ビンセントとセルロが続く。セルロはほかの席にいる派手な服装の娘に話しに行く。パーカー||ジェニングズは小柄だが恰幅のよい男で、ごく普通だが自己顕示欲が強い。夫人は断固とした風貌で、趣味は悪いが、見事な服装をしている。ビンセントは派手で押しが強い。エセルはとも魅力的でもかわい。セルロは全く取るに足らない。パーカー||ジェニングズ夫人は、ウォンリー夫人の席を無視するのに苦心しながら、一行と一緒に舞台の中央に下りて来る。ロージーが立ち上がって、気持ちの赴くままパーカー||ジェニングズ夫人のところへ行く。ウィザーズ夫人と夫も立ち上がる。

ロージー ジェニングズ夫人、お会いできてとても嬉しいです。

パーカー||ジェニングズ夫人 「よそよそしく眼鏡を持ち上げて」アボット夫人。

ウィザーズ やあ、ボブ、子供たちは元気かな？

パーカー||ジェニングズ うちはみんなこれ以上ないくらい元気だよ、ありがとう。

エセル 「ウィザーズ夫人と握手しながら」あなたとお話するチャンスがあればと思っていましたの。

ウィザーズ夫人 あなたったら、何て絵に描いたみたいに美しいの！ ビンセントはどうしたの？ どうして今までわたしと会ったことがないようなふりをするの？

ビンセント あなたを忘れていたら許してもらえませんかよ、ウィザーズ夫人。

ウィザーズ夫人 ええ、許さないわ。ブリクストンのセント・ジョンズ・ロードのあの小さな奥の部屋でこの坊やお風呂に入れたことが何度もあったんだから。それも忘れないでね。

ロージー 「熱心にパーカー||ジェニングズ夫人に向かつて」ここでわたしたちに会ってお驚きじゃありませんか？ ウィザーズご夫妻にごちそうになつてますの。

パーカー||ジェニングズ夫人 ここが牧師の奥さんが来るのにびったりな場所だなんて考えつこないわね。実を言うと、ロンドンで遊び歩くために、あなたがタバナーの仕事を放っておく暇があることに驚いているわ。

ロージーは出鼻をくじかれて驚き、暗い顔になる。

ロージー でも、わたしたちがここにいるのは一両日だけですわ。木曜日には帰ります。ルイスが出掛けなければならぬので、昼食までには戻らなければと思つていますの。

パーカー||ジェニングズ夫人 セルロ卿のお母様とエレノア・キング夫人があたくしと一緒に滞在するしよから、できれば、あなたは二、三日ホールには近づかない方がよろしいわね。お分かりよね。あなたの気持ちは傷つけないけれど、あなたはちようどあの方たちが会いたような類の人じゃないと思うの。

ロージーははつと息をのむ。

エセル 「憤然として」お母様。

パーカー||ジェニングズ夫人 あなたに来ていただくのが都合のいい時はお知らせするわ。あなたはちよつとでしやばる傾向があるんじゃないかしら。あたくしが言つてること、気にしないわね。気にするとしたら、牧師の妻としてまっとうなことは言えないわ。

パーカー||ジェニングズ夫人はロージーに背を向け、ロージーは息をのんだままにしておかれる。ロージーはすすり泣きを抑えようと  
するが、悔し涙が頬を伝つて落ちる。

ウォンリー夫人 全く、ひどい人、ひどいわ。

ウォンリー夫人はロージーを座らせて慰める。

エセル お母様、どうしてそんなことができるの。

パーカー||ジェニングズ夫人 お黙りなさい、エセル。前々からあいう人たちに一度は教えてやりたいと思つていたのよ。あたくしたちの席はどこの、ロバート？

パーカー||ジェニングズ あそこは誰かが座っているよ、お前。わたしたちはこっちの席にしなけりやならんだろう。

パーカー||ジェニングズ夫人 あの前席を取っておくよう、ボーイに言わなかったの？  
ボーイさん！

ジャック・ストロー はい、お客様。

パーカー||ジェニングズ夫人 あのあたりにあの席は予約済みだって言っちゃようだ  
い。

ジャック・ストロー 申し訳ございません。こちらのお席に代えていただく訳にはま  
いりませんか。

エセル ええ、お母様。ここに座りましょうよ。

パーカー・ジェニングズ夫人 人様が好むような目立たない場所に押し込められるつ  
もりはないわ。

ビンセント 生気としか言いようがない。

パーカー||ジェニングズ まあまあ、座りなさい、お母さん。

パーカー||ジェニングズ夫人 「不承不承、空いた席に座りながら」何度言ったら分  
かるの、あたくしのことを「お母さん」なんて呼ばないでつて。あたくし  
の名前はマリオンよ。いい加減、分かってもよさそうなのに。

パーカー||ジェニングズ そうだっけ？ ずっとマリアだと思つてた。

パーカー||ジェニングズ夫人 「ジャック・ストローに向かって」そこで何を待つて  
るの？

ジャック・ストロー ご注文がおありかと存じまして、お客様。

パーカー||ジェニングズ夫人 どうしてあの席を取つておいてくれなかったの、え  
っ？

ジャック・ストロー 大変申し訳ございません、お客様、恐らくわたくしが取り違え  
ましたので。

パーカー||ジェニングズ夫人 英語が分からないの？

ジャック・ストロー 完全には、お客様。

パーカー||ジェニングズ夫人 どうしてこんな不潔な外国人を雇いたがるのか分から  
ないわ。こつちまで病気になるわ。

エセル お母様、この人に全部聞こえてるわ。

パーカー||ジェニングズ ユーヒー二つと、店にあるリキュールを全部持つて来てく  
れ。

ジャック・ストロー かしこまりました、お客様、葉巻かおタバコは？

パーカー||ジェニングズ 葉巻をもらおうか。二ペンスものの香りの悪いやつはいら  
んよ。店にある一番高いやつを持つて来てくれ。わしが誰だか、みんなに  
もすぐ分かるだろう。

ジャック・ストロー かしこまりました、お客様。

出て行く。

エセル お母様、かわいそうに、どうしてロージーにあんなにつらく当たるの？ あ  
の人が何をしたつていうの？

パーカー||ジェニングズ夫人 あたくしのことを「お母様」なんて呼んでもらいたくないわ。下品に聞こえるもの。「ママ」って呼べばいいのに。

パーカー||ジェニングズ 閣下が話している相手は誰だ？

ビンセント ああ、あれはフロツシー・スクエアアトーズですよ。ちよっと見に行ってください。

パーカー||ジェニングズ夫人 お前ももうちよっとお兄さんを見習うといいんだけど、エセル。お兄さんは地位にふさわしい生活の仕方が分かっているわ。

ビンセント 「H（エイチ）」です、お母さん、「H（エイチ）」ですよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 そうだったわ、あたくしが「H（エイチ）」を発音しないって、お前はいつも言うわね、ビンセント。でも、あたくしが「H（エイチ）」を発音しなくても、それでやっていけるわ。

ビンセント 違いますよ、お母さん、「H（エイチ）」を発音しなくても構わないのは貴族だけですよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 あら、じゃあ、ひよっとするとあたくしたちも近いうちに貴族になれるわね、そうでしょ、ロバート？

パーカー||ジェニングズ わしに任せなさい、お前。金でそれができるなら……。ほら、昼食で閣下がわしのワインを空けてしまっただろ。

パーカー||ジェニングズ夫人 あなたが人様が何を食べて飲むかをいつも見てるって、いうその習慣から抜け出せるといいんだけど。あの人ワインを空けてしまったっていいじゃない。人様に見せるためにワインを置いた訳じゃないでしょ。

ビンセント なあ、エセル、お前もずっとあの人に背を向けてる必要はなかったのに。エセル あの人、飲み過ぎだと思っただけから。

ビンセント お前の考えは随分中産階級的だよ。セルロみたいな男に期待しちやいないんだよ——僕たちがよく知ってる人たちのように振る舞うことは……。

パーカー||ジェニングズ夫人 それでいいのよ、ビンセント。あなたのお父さんのおじさんが亡くなる前は自分たちがどこに住んでいたか、あたくしたちはよく分かっているけど、そんなこと言う必要ないわ。「エセルは苛立って肩をすくめる。」家族の中で、ビンセントとあたくしだけが地位にふさわしい生活の仕方を分かっているみたいね。「ジャック・ストローがコーヒーとリキュールを持って近づいて来る。もう一人のボーイが葉巻を配る。セルロが再び加わる。」「非常に愛想よく」あたくしの隣にお座りください、セルロ卿。さてと、どのリキュールをお飲みかしら？ お好みがあれば、おっしゃってください。

ロージーはちよっとすすり泣く。

ウォンリー夫人 まあ、あなた、泣かないで、泣かないでちょうだい。気にすることないわ。

ロージー　すごく傷つけられた気分なんです。来たい時にはいつでもお屋敷にいらっしやいておっしゃったのは本気だと思ってました。来て欲しくないとしか思われてるなんて、ちっとも知りませんでした。ひどいでしゃばりとか思われてなかったのが分かってこわいくらいです。

アボット　全くだ、相手が男だったらよかったのに。殴り倒して踏みつけてやるころだ。

ウォンリー夫人　ねえルイス、あなたったら何て素敵で反キリスト教的なの！　あなたはわたしにとって正に正しいタイプの聖者だって、わたしはいつも言うてたのに。

ウィザーズ夫人　もう行かないこと、あなた？

ロージー　ええ、はい、消えてしまいたい気分です。

ウォンリー夫人　さようなら、あまり深刻に考えないでね。「ウィザーズ夫妻、アボットとロージーは、ホーランドとウォンリー夫人に握手して、出て行く。」あんなひどい話、聞いたことあるかしら？　全くもう、あの人がかわいそうなロージーを苦しめたように、わたしがあの人を苦しめることができたらいいんだけど。「突然思いついて、身を乗り出す。」アンプローズ。

ホーランド　どうしたんですか？

ウォンリー夫人　分かったわ。

ホーランド　どういうことですか？

ウォンリー夫人　近いうちに、ジェニングズ夫人はあのかわいそうな子を侮辱しなかつたことにするために、目でもくれてやるはめになるわ。絶対忘れないように、思い知らせてやるんだから。

ホーランド　あの人はあなたが女性特有の意地悪さで思いつく限りのほとんど何にでも匹敵しますよ。

ウォンリー夫人　あなたがいないとどうにもできないのよ、アンプローズ。

ホーランド　あまりみつともないことはやらせないでくださいよ。

ウォンリー夫人　わたしはあの人を思いのままにできるのよ、アンプローズ。

ホーランド　それで？

ウォンリー夫人　エイドリアン・フォン・ブレマーから聞いた大使館員の話覚えてないの？　あれをジェニングズ夫人にやってみましょうよ。

ホーランド　でも……。

ウォンリー夫人　あらま、反対なんかしないでちょうだい。覚えてるはずだわ。その大使館員は自分の召使を外国のさる貴族だと言って女性に紹介したのよ。

ホーランド　実に馬鹿馬鹿しいやり口だと思ったとしか言いようがないね。

ウォンリー夫人　あなたには我慢できないわ。罰を罪に正しく合わせる方法を考えてちょうだい。大成功でしょ、パーカー・ジェニングズ夫人に温かく受け入れさせることができたら……。

ホーランド　誰を？

ウォンリー夫人　あなたの友達のあのボーイよ。あなたが頼めば、あの人はきつとやってくれるわ。面白い冒険だと思うわよ。



ホーランド やらないと思いますね。変わった奴だから。

ウォンリー夫人 あら、でも、頼んでちょうだい。頼んでも損にはならないわ。

ホーランド 全然構いませんよ。でも、悶着の種になりかねないということを考えなければ。

ウォンリー夫人 悶着の種になんかなりっこないわ。わたしたちは、今まで蠅も殺したこともない女性を理由もなしに侮辱した無礼な俗物を罰したいだけよ。

ジャック・ストローが二人の席の側までやって来る。

ジャック・ストロー ベネディクティヌ（フランス産リキュールの一種）はご満足

でしたでしょうか、お客様？

ウォンリー夫人 ストローさん、やっていただきたいことがあるの。

ジャック・ストロー 何なりと、お客様。

ウォンリー夫人 ホーランドさんがおっしゃるには、あなたは気骨のある方だって。

ジャック・ストロー ホーランド様におっしゃってください、そちらは思慮分別のある方ですと。

ウォンリー夫人 あなたにはまだ、巡って来る冒険に対処する用意があるのかしら？

ジャック・ストロー やましいことなくできることでしたら。

ウォンリー夫人 あらまあ。

ジャック・ストロー 多分、お客様は、ボーイに感情があるのが変だと思いませんか？

ホーランド 今のうちに言わせてもらうけど、わたしはウォンリー夫人の思いつきに全く不賛成なんだよ。

ジャック・ストロー それなら、ぜひ聞かせていただかなければ。あなた様がいつも不賛成なのは、見込みがない訳ではないごく普通のことに対してですから。

ウォンリー夫人 たった今、あなたはここに臨時で雇われているだけだって言ったわよね。

ジャック・ストロー 全くその通りで、お客様。

ウォンリー夫人 あそこにいるあの人たちが見えるかしら——女性二人と男性三人の？

ジャック・ストロー 年上の方の婦人はお優しい方で、わたしのことを不潔な外国人と呼んでくださいました。

ウォンリー夫人 あの人たちは一番たちの悪い成り上がり者なの。ロンドンで一番ひどい俗物だと思わ。あの人たちにはいささか恨みがあるのよ。

ジャック・ストロー それで？

ウォンリー夫人 「ちよっと恥ずかしそうに」あなたをあの人たちに紹介したいのよ——外国の貴族としてね。

ジャック・ストロー 「探るような目つきでウォンリー夫人を見ながら」どうしてですか？

パーカー||ジェニングズ 「大声で」ボーイさん。

ウオンリー夫人 あの人たちがあなたにぺこぺこするのを見たら笑えるでしょうね。

間がある。

ジャック・ストロー いや、そんなことできません。

ウオンリー夫人 「冷ややかに」それなら、もうこれ以上言わないわ。

パーカー||ジェニングズ 「大声で」ボーイ。

ジャック・ストロー 「パーカー||ジェニングズのところへ向かいながら」はい、お客様。

パーカー||ジェニングズ 一体どうして急がんだかね。三度も呼んだんだぞ。

ジャック・ストロー 「平然と」申し訳ございません、お客様。ほかのお席で手がふ

さがっておりました。

パーカー||ジェニングズ 一日中でも待たせることができると思っっているみたいだな。

それでお前たちはウエーターとも呼ばれるんだな。

パーカー||ジェニングズ夫人 ロバート、使用人風情を相手に冗談なんか言わないで

ちようだい。

パーカー||ジェニングズ お前のことを雇い主に訴えるぞ。

エセル パパ、この人はできるだけ早く来たんだわ。

パーカー||ジェニングズ このコーヒーは気持ちが悪くなる。どうやって入れているのか分かったもんじゃない。どぶみたいな臭いがする。

ジュック・ストロー 申し訳ございません、お客様。代わりをお持ちいたします。

パーカー||ジェニングズ 今度は気をつけるよ。さもないと、お前の国にはない勲章をもらうことになるぞ。

ジャック・ストロー 何のことでございましょうか、お客様？

パーカー||ジェニングズ お払い箱という勲章だよ。

ビンセント ここみたいなちゃんとしたホテルが、どうしてこういう汚らしい外国人に代えてイギリス人のボーイを雇わないのか分りかねますね。

パーカー||ジェニングズ さあ、ぐずぐずしてる場合じゃないぞ。

ジャック・ストローはエセルに目が釘付けになってしまっている。

エセルはうつむいたままでいる。エセルがジャック・ストローをちらつと見る。ジャック・ストローはコーヒーの器を持って行き、別のボーイに渡す。

のボーイに渡す。

エセル 「憤慨して声を震わせながら」言い訳できない人に対して、どうしてあんな

なことが言えるの？ 口答えしようとしないう使用人を侮辱するなんて、随

分卑怯だわ。

ビンセント そんなことはないよ。僕は使用人に答えてもらいたいね。

パーカー||ジェニングズ夫人 お前は使用人の扱い方を知らないのよ。お前が使用人に話しかける時は、いつだって自分の仲間に話しかけるみたいじゃないの。

お前もビンセントを見習うといいんだけど。使用人は粗末に扱うのよ。そうすれば使用人から尊敬されるわ。

先ほどのボーイに指示を与えていたジャック・ストローがホーランドとウォンリー夫人のところへ行く。

ジャック・ストロー 先ほど頼まれたこと、喜んでやりますよ。

ホーランド どうして気が変わったのかね？

ジャック・ストロー 正直言つて、お客様のお友達が無礼で下品なことには全く興味がございませんが、あの若いご婦人のことを知りたいと存じまして。

ホーランド 君が、まさか！

ジャック・ストロー あのご婦人のお父上がわたくしを侮辱なされた時、あのご婦人の青白い頬にこれ以上ないくらいうっとりするような色がさして、この世で一番美しい目でわたくしをご覧になりました。そして、その目には涙のベールがかかっておりました。

ウォンリー夫人 それだけのことで気が変わるの？

ホーランド 幸いなことに、ストロー君には恋に落ちる習慣がないんです。そうでなければ、わたしはこの馬鹿げた策略にこれ以上聞く耳を持ちませんね。

ウォンリー夫人 いつ始められるの？

ジャック・ストロー 今からでも。もう三時で、ピエールがこの制服を着るために地下で待っています。

ウォンリー夫人 紹介するのに、これ以上いい場所はないわ。

ジャック・ストロー 服を着替えるのに二分下さい。それからご用を承ります。

ウォンリー夫人 あなたには本当に冒険心があるわ。

ジャック・ストロー ですが、条件が一つ——実は二つあります。

ウォンリー夫人 何かしら？

ジャック・ストロー それは、お客様は類いまれなる思慮分別で目的をさらっとおっしゃいましたが、わたくしがあの立派な方々のお金で個人的にくすくす笑って楽しむだけにある人物を演じるのを望んでらっしゃらないのははつきりしております。

ウォンリー夫人 どういうことだか分からないわ。

ジャック・ストロー お客様、お仲間の愚かさに期待しすぎるのは常に危険が伴います。わたくしが抜け目のない人間だと思えば、この件をもっときちんと準備するべきです。

ホーランド 続けたまえ。

ジャック・ストロー ある日、わたくしがただのペテン師だということをあの立派な方々に教える機会を作るためには、わたくしがあの方々に温かく迎えらるるのをお客様が望みなのは確かです。

ウォンリー夫人 実はそこまで考えてなかったわ。

ジャック・ストロー 失礼ながら、お客様はご自分の知能をあまりにも低く評価されているのではないかと思います。

ウオンリー夫人 それで、あなたの条件は何なの？

ジャック・ストロー 今度の立場はわたくしにとって非常に屈辱的なものになります。わたくしの知るかぎりでは、わたくしが警察と不快な関係に陥るかもしれないません。

ホーランド 計画そのものをやめた方がいいと思うね。果てしない面倒の種類になるよ。

ジャック・ストロー やめにしたとは思っておりません。お客様が侮辱した人たちに仕返しをしたいんですから。わたくしは、わたくしなりの理由で、喜んでお手伝いいたします。ですが、わたくしがいいと言うまで本当のことを表沙汰にしないということにさせていただきます。理由もなくわたくしがいいと言わないなどということはないとお約束いたします。

ウオンリー夫人 分かりました。で、もう一つの条件は？

ジャック・ストロー とても簡単なことです。ぜひともお願いしたいのは、わたくしたちだけしかいない時でも公衆の面前でも、もしわたくしが本当にわたくしが演じようとする人間だとしたら、お客様が当然わたくしに対して振る舞うのと同じように振る舞っていただきたいのです。

ウオンリー夫人 極めて当然ね。さてと、あなたを誰だということにすればいいのかしら？

ホーランド 存在しないことが確かな人物をでっちあげるようにした方がいいね。

ウオンリー夫人 贅沢で仰々しい感じが欲しいわね。

ジャック・ストロー 苦労して考えるには及びません。わたくしのことをポメラニアのセバスチャン大公だと言ってお友達に紹介してください。

ホーランド 何だって！

ウオンリー夫人 でも、それは実在の人物じゃないの！

ジャック・ストロー 実在しない人物をでっちあげるなんて、馬鹿馬鹿しいですよ。

お友達がゴータ年鑑（ドイツのゴータで刊行された年鑑、ヨーロッパの王侯・貴族の詳しい系譜を記載して有名だった）を調べさえすればペテン師だと分かってしまうんですから。

ウオンリー夫人 でも、フォン・ブレマー伯爵が今さっき大公のことを話してくれていたじゃないの。セバスチャン大公は謎めいた姿のくらし方をした方だつて。

ジャック・ストロー 消息が不明だからこそ、一番安心して選べる人間なんですよ。ホーランド 君を大公として触れ込むことはできないだろ。

ジャック・ストロー 意外にお思いかもありませんが、王子様だって、食べて、飲んで、息をして、普通に振る舞うのは、卑しい人間と全く同じなんですよ。

ウオンリー夫人 一週間でばれてしまうわ。

ジャック・ストロー でも、わたくしがセバスチャン大公じゃないって、どうして分かりませんか？

ホーランド 「嘲笑いながら」それらしく見えるよ。

ウォンリー夫人 でも、スーツとかいろんなものがあるわね。

ジャック・ストロー あの方が変わり者なのは知れ渡っています。あの方が古風な騎兵の老大佐に死ぬほど退屈したというのは大いにありそうなことだと思います。

ホーランド そんなの馬鹿げてる。

ジャック・ストロー やってもやらなくてもよろしいんですよ。わたくしがセバスチヤン大公になるか誰にもならないかということでございます。

ウォンリー夫人 とにかく、ジェニングズ夫人は恐らくこの見かけ倒しの大公の噂は聞いたことがないでしょうね。

ジャック・ストロー それに、聞いたことがあったとしても、大公が隠れているのに飽きて、当然自分のものである地位をもう一度手に入れようという話ほどもっともらしい話があるでしょうか？

ウォンリー夫人 「ホーランドを見ながら」それでいたずらがずっと面白くなるわね。ジャック・ストロー 今すぐ決めていただかなければ。

ウォンリー夫人 アンブローズ、コインを投げて決めましょうよ。表ならやるし、裏ならやめるということで。

ホーランド よろしい。「コインを投げる。」裏だ。

ウォンリー夫人 わたしが言ったのは、裏ならやるじゃなかったかしら……？ わたしは一か八かやってみる気があるんだけど。

ジャック・ストロー 二分お待ちください。

ジャック・ストローは出て行く。

ホーランド 結果がどうなるかは神様だけがご存じだ。

セルロ卿が二人のところに近づいて来る。

セルロ やあ、アンブローズ。元気かね？ どうしてた？

ウォンリー夫人 何をなさってたんですか？

セルロ 「ジェニングズ特許金物」に昼食をおごらせていたんですよ。全く、あのおばさんは卑しいから、ほとんどしゃべりまくって人をうんざりさせます。

ホーランド どうしてご自分がとことん軽蔑している人間と昼食を一緒にするんですか？

セルロ 軽蔑しているだと！ 一年で八千ポンド手に入れた人間を軽蔑はしないよ。彼らは娘の結婚相手にわたしを捕まえようとしているんだ。

ホーランド それで、あなたが考えているのは——夫になるということですか？

セルロ 彼女は品よく歩く若い娘だ——子供の頃に火かき棒のみ込んで堅苦しい顔つきになってしまつて——子供部屋での痛ましい事故だよ。でも、全く健康そのものなんだ。

ウォンリー夫人 あなたのロマンチックなご様子には感心いたしますわ。

セルロ 一体誰がロマンチックなことを言ったかな？ 一方に五十万ポンドの現金があつて、もう一方に古くからの侯爵の領地があるんだ。

ホーランド そのおめでたい式はいつ執り行われるんですか？

セルロ それは、ちよつとした障害を乗り越えたらすぐだよ。

ウォンリー夫人 それは何ですか？

セルロ それは、あの娘が嫌がつているんですよ。何しろ、彼女の尻尾に赤いリボンをつけなければなりませんからね。

ウォンリー夫人 あなたがあの子の足下に捧げる冠をあの子は拒否しているんですか？

セルロ そんなことはまっぴらだつて。昼食の時にわたしは彼女の隣に座つていましたが、彼女はわたしに背を向けるだけで——間違ひありませんよね。口をはさむこともろくにさせてもらえませんでした。母親がわたしにべたべたして、父親もわたしにべたべたして、息子もわたしにべたべたして。それが何の役に立つというのですか？ 彼らと結婚する訳じゃありません。面白くないとしか言いようがありません。ちよつと息抜きをしようと思つてここに來たんです。

ウォンリー夫人 「笑いながら」ところで、ビンセントはどうかしら？

セルロ つまらん無作法者ですよ。彼には全く我慢ならんし、手に負えません。彼が義理の兄弟になつたら——追ひ出してやりませよ——即行でね。かわいイポリーは言うことありませんが、家族まで迎えるつもりはありません。五十万ポンドでそんなことはできませんよね。現実的でなければいけません。

ビンセントが側までやつて来る。

ビンセント ご機嫌いかがですか、ウォンリー夫人？ 昨日マリー・ウェア夫人とド

ライブされているのをお見かけしました。とても素敵な方ですよ。あの方のご兄弟のトレグリーをご存じですよ。オックスフォードで僕と大の仲良しでした。

ウォンリー夫人 あの人はわたしの又従兄弟なんですよ、ジェニングズさん。彼は自分の名前をトレグリーつて発音しますけど。

ビンセント ああ、そうです、もちろん。僕はいつもふざけて彼のことをトレグリーつて呼んでたんです。

ウォンリー夫人 そうなの？

ホーランド 君にはとても鋭いユーモアのセンスがあるんだね。

ビンセント 彼がシャーウィン公爵とどういふ親戚かということについてちよつど話し合つてたところなんです。

ウォンリー夫人　あなたが貴族についてどれだけ知っているのか、わたしには分かりませんが、この二世紀の間の二人に共通の親族は、あの今は亡き君主のチャールズ二世だけだと思わ。

ビンセント　「セルロに向かつて」いい奴ですよ、シャーウィンは。

セルロ　そんな奴知らんな。

ビンセント　そうですか？ シャーウィンを知らないんですか？　あなたを彼に紹介しなければ。彼もあなたと知り合いになりたいはずです。全くのスポーツマンなんです。

セルロ　そうなのかね？

ビンセント　ええ、かなりのね。先日、クリケットの試合で彼が見物しているのを目にしました。何しろ、僕のおやじと大の仲良しなんですから。完璧なイギリス紳士です。

セルロ　その二人ならうまくいくだろうね。

ウォンリー夫人　「ホーランドに向かつて」友達が来たわ。

ジャック・ストローが、帽子とステッキを手にして入って来る。とてもスマートなスーツ、テールコート、グレーのズボン等々を身に着けている。

ジャック・ストロー　昼食をご一緒できなくて非常に申し訳ない。

ジャック・ストローがウォンリー夫人と握手すると、夫人は膝を曲げて軽く会釈する。ジェニングズ夫人が夫をつつき、二人揃ってまじまじと見つめる。

ウォンリー夫人　お越しいただいてどうもありがとうございます、閣下。

ジャック・ストローが　おや、ホーランド君、君は健康そのものみたいだね。

ホーランド　どうもありがとうございます、閣下。

ウォンリー夫人　セルロ卿をご紹介しますわ。

ジャック・ストロー　「セルロと握手しながら」初めまして。あなたのお父上はしばらくの間ポメラニア駐在の大使だったと思うのだが。

セルロ　はい、そうです。

ホーランド　「驚いて」どうしてそれをご存じなんですか——閣下？

ジャック・ストロー　よく覚えているよ。わたしが子供だった時にはよく遊んでもらったものだ。亡くなられたのを聞いてとても残念だった。

セルロ　父は役立たずの老いぼれではありませんでした。もっとも、わたしを懐が寒い状態におきましたわ。

ジャック・ストロー　「陽気に」でも、わたしをセルロ卿に紹介してくれなければ、わたしが一体誰なのか、セルロ卿にも分からないだろうに。

ウオンリー夫人 皆さん、とにかく見れば分かると思っています——ポメラニアのセバ  
スチャン大公ですもの。

ジャック・ストロー あなたのおっしゃり方だと、まるでわたしが悪名高い人物みた  
いだ。「ここまで、ビンセントは紹介してもらいたい素振りを見せるのに大  
わらわで、咳払いをしたり、脚を組み換えたりしている。ジャック・スト  
ローは眼鏡越しにビンセントを見る。」お友達を紹介してもらえませんか？  
ウオンリー夫人 ビンセント・パーカー||ジェニングズさんですわ。

ビンセント 殿下とお近づきになれてとても光栄で誇らしく思います。  
ジャック・ストロー そう言っていたいただいてとてもありがたく思います。

ビンセント わたしはポメラニアにはずっと大きな思いを馳せてきました。ヨーロッ  
パで一番素晴らしい国、そうわたしはいつも言っているんです。

ジャック・ストロー あなたがそう思われていることを祖父に伝えましょう。喜びも  
し嬉しくも思うことでしょう。

ビンセント わたしはポメラニアに行ったことがありませんですよ、閣下。でも、  
エイドリアン・フォン・ブレマーから聞いて何もかも知っております。

ホーランド 「急に」お国の大使がジェニングズさんのすぐ近くにお住まいなんです。  
ジャック・ストロー ああ、そう。

ビンセント 大使のお屋敷はわたしどものお隣なんですよ。完璧なスポーツマンで。  
それでこそ、紳士というものです。

ジャック・ストロー あなたのお名前はよく知っている気がします。  
ウオンリー夫人 パーカー||ジェニングズさんは大変な慈善家なんです。カーネギー

氏の無料図書館全部に入れる本を提供しましたの。

ジャック・ストロー 何と気高い行為だ。ぜひとも、お近づきになりたいものです。  
ビンセント 父は母と妹と一緒にあちらに座っております。連れてまいりますようか、

閣下？

ジャック・ストロー そんなにお手間を取らせて、大変申し訳ない。

ホーランド 「ジャック・ストローに向かって低い声で」頼むから、気をつけて。

ジャック・ストロー 「眼鏡を上げながら」申し訳ないが、聞き取れなかった……。

どうか、もう一度言ってくれたまえ。

ホーランド 「困ったように」大したことではありません、閣下。

パーカー||ジェニングズ夫人 「ビンセントに向かって」あれは誰なの、ビンセント？

ウオンリー夫人が膝を曲げて会釈してたわ。

ビンセント 一緒に行きましょう、お父さん。あの人がお父さんに紹介して欲しがっ  
ています。

パーカー||ジェニングズ夫人 あたくしも行くわ、ビンセント。

ビンセント すごくいい奴です。セバスチャン大公ですよ。やったね！

パーカー||ジェニングズ でも、いいかい、ビンセント、王族にどう話しかけていい

のか、わたしには分からのだ。どういふふうの話せばいいんだ？



ビンセント そんなの、大丈夫ですよ。「閣下」っていう言葉をはさめるところではどこでも「閣下」って言って、「殿下」って言っちゃいけない時にも「閣下」って言うってください。

ジャック・ストローはウオンリー夫人と一緒に少し進み出る。

ウオンリー夫人 こちらはパーカー||ジェニングズ夫人です。

ジャック・ストロー 「パーカー||ジェニングズ夫人と握手しながら」お近づきになれて嬉しく思います。「パーカー||ジェニングズの方を向いて」あなたのお噂はよく聞いております、えーと……。えーと……。

ウオンリー夫人 「助け舟を出して」パーカー||ジェニングズさん。

ジャック・ストロー 「ほっとして微笑んで」パーカー||ジェニングズさん。わたしの国にもあなたのような公共心があつて私心のない人間がもつといたらと思います。

パーカー||ジェニングズ 「非常に緊張しながら」微力ながら最善を尽くそうとしております、閣下、殿下。

ジャック・ストロー お嬢さんに紹介していただけませんか？

パーカー||ジェニングズ 全く、閣下、殿下は実に気おけない方だ。エセル！

エセルはゆつくりと進み出て、膝を曲げて会釈する。ジャック・ストローはエセルをじつと見、手を取ってキスする。

ビンセント 「低い声で」やったね！

第一幕終わり

## 第二幕

チェシアにあるパーカー・ジェニングズ家の屋敷、タバナーの客間。窓が外の庭に面している。パーカー・ジェニングズ夫人が見事な装いで部屋の中央に立っている。パーカー・ジェニングズが両手をこすりながら入って来る。

パーカー・ジェニングズ 楽団はもう来ていて、誰かさんが姿を見せればいつでも演奏が始められるよ。

パーカー・ジェニングズ夫人 ポメラニア国歌のことは言っているの？

パーカー・ジェニングズ 言ったかどうか、お前はと思う？

パーカー・ジェニングズ夫人 そんなふうに答えて欲しくないわ。「うん」とか「いや」とか言ったらどうなの？ あなたのこういう商売人のやり方には我慢できないわ。

パーカー・ジェニングズ わしは冗談のつもりなだけだけど、お前。

パーカー・ジェニングズ夫人 おかしいってことは下品なことだって、そろそろ分かってもいい頃だと思っただけ。公爵夫人が冗談を言うなんて、聞いたことないでしょ？

ビンセントが入って来る。

ビンセント ちょっと食事用のテントを回って来ました。一つ言っておくけど、うちが奮発してないなんて、客は言えっこありませんよ。

パーカー・ジェニングズ 「両手を揉みながら」ただの一つも出費を惜しんでないからな。楽団はロンドンから呼んだし、食事は「ガンターズ」からだ。あの店には一ポンド六シリングより安い葉巻は置いてないんだ——それも卸値でだぞ。

パーカー・ジェニングズ夫人 あら、あたくしたちはよくやったのよ。それは否定できないわ。あたくし、ウィザーズ夫妻を呼んだの、ロバート。フロリー・ウィザーズは嫉妬で気が狂うでしょうね。あの人がキャビアのサンドイッチを飲み込む時に嫉妬でむせたとしても不思議じゃないわ。

パーカー・ジェニングズ うちが大公を泊まりに来させた時こそ、めったにない儲かるチャンスだった。

ビンセント それは僕を通じてですよ、お父さん。僕がその場にいないければ、お父さんがあの方と知り合うことはなかったんだから。

パーカー・ジェニングズ夫人 あたくし、ウォンリー夫人も呼んだの。あたくしがあの人なしでもうまくやれるところを見てもらいたいだけなんだけど。あたくし、みんなに招待状を送ったの。知り合いの人にも、知り合いでない人にも。みんな招待を受けたわ。

パーカー||ジェニングズ 覚えてないの、マリオン？ 昔、ご主人がロンドン市議会の会期中だからというので、ブROOMズグロブ夫人が夕食に来た時、わしたちがどれだけ喜んだか。

パーカー||ジェニングズ夫人 あの人の今のあたくしを見せたいわ。あの人があたくしをどれだけ見下したように扱っていたか、覚えてる？ あたくしが望むのは、ブリクストン・ヒルのお高くとまった連中がここであたくしたちが貴族と親しくお付き合いするのを見ることに尽きるわ。

パーカー||ジェニングズ 大公がそれを果たしてくれるよ、お前。

パーカー||ジェニングズ夫人 今や、セルロが何だというの？ セルロ侯爵なんか――ふん。あの人にはもうチャンスをあげないわ――そして、あの人が何か言っても、耳の痛いことを言っただけよ。

ビンセント 抑えてください、お母さん。

パーカー||ジェニングズ お母さんは偉大な人だ、ビンセント。今日はお母さんにとつて一世一代の日なんだよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 セルロにここに泊まってくれなんて、馬鹿なことを言わなければよかった。いかにもいまましいあの子らしいわ。あたくしがエセルをあの人と結婚させたいと思った時、あの子はあの人を見ようともしなかったし、今は望みさえすればほかに誰かいるのに、一日中あの人と一緒に一緒なんだから。

ビンセント そういうことなら、僕は確実な方を支持しますよ、お母さん。大公はあまり結婚しそうな人には思えませんからね。

パーカー||ジェニングズ夫人 そんなことは気にしないでいいのよ、お前。五十万ポンド持つてるかわいい娘と結婚できるチャンスがあれば、どんな男だって結婚したがるんだから。

エセルがセルロ卿と一緒に入って来る。

エセル ウィザーズ夫妻が車で着いたところよ、お母様。

パーカー||ジェニングズ夫人 あの人たちが一番乗りなのね。フローリー・ウィザーズは四時に時計が鳴るまで玄関口で待っているんだと思うわ。殿下はどこかしら？

エセル 全然分らないわ。

セルロ あの方は庭で寝ています。あそこで一番座り心地のいい椅子に座って、両脚をそれぞれ別の椅子に載せています。そして、手にはジンのソーダ割りの入った非常に長いグラスらしきものを握っています。

パーカー||ジェニングズ夫人 それなら、誰か行って起こしてちょうだい。この地域の半分の人たちにあの方に会ってもらうんだから、寝かせておく訳にはいかないのよ。

ジャック・ストローが入って来る。

ジャック・ストロー おいおい、何だってひどい楽団にポメラニア国歌を演奏させているのかね？ 目が覚めてしまったよ。しかも、あんなに気持ちよくひと眠りしていたというのに。

パーカー||ジェニングズ夫人 「非常に愛想よく」みなさんがちようどお見えになるところですわ、閣下。

ジャック・ストロー どんな人たちかね？

パーカー||ジェニングズ夫人 チェシアで正に一番立派な方々全員ですわ——今日はそれ以外の人はいません。すごいわ！

ジャック・ストロー 何てことだ、パーティーをやるのかね？

パーカー||ジェニングズ夫人 覚えていないんですか、閣下？ 閣下に会わせるために友達を二、三人呼んでもよろしいかつて、お聞きしましたでしょ。

ジャック・ストロー ああ、そうだった。——ウォンリー夫人とホーランドね。庭で楽しくブリッジができるだろうと思つてね。何だつて村の楽団を呼んだのかね？

ビンセント あれは村の楽団ではありません、閣下。「ロイヤル・ブルー・オーケストラ」ですよ。

パーカー||ジェニングズ ロンドンから特別列車で来てもらうのに百五十ポンドかかります。全部でいくらかかるのか分かりません。

ビンセント およしなさい、お父さん。いくら払ったかなんて、誰にでも言うもんじやありませんよ。

ジャック・ストロー 何人来るのかね？

パーカー||ジェニングズ夫人 ええと——ごく親しい友達だけですわ——大体……。

ジャック・ストロー うん？

パーカー||ジェニングズ夫人 ええと、大体三百五十人くらいですわ。

ジャック・ストロー 驚いたね、そりや愉快だ。わたしに全員と握手しろと？

パーカー||ジェニングズ 皆さんこの地方で正に一番立派な方々なんです、閣下。一流の人たちですよ。

召使が入って来て、ウイザーズ夫妻の到着を告げる。二人が入って来る。

召使 ウイザーズご夫妻です。

パーカー||ジェニングズ夫人 ご機嫌いかが？ 誰よりも早く来てくださつて嬉しいわ。

ウイザーズ夫人 わたしたちはあなたがこういう盛大なパーティーに慣れていないのを知っているから、マリア、何かやってあげられる昔からの友達夫婦が必ず要だと思つたのよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 まあ、ありがとう。でも、召使がたくさんいるわ。殿下にウイザーズ夫妻をご紹介します。

ジャック・ストロー 初めまして。

パーカー・ジェニングズ夫人 あたくしたち、ちょうどお庭に行くところでしたの。  
多分、もうすぐ皆さんが来始めるころだわ。

エセルとセルロ卿以外は出て行く。

セルロ ねえ、僕は明日ずらかるつもりだなんだ。

エセル そうなの？ 残念だわ。

セルロ もっと早く思いつけばよかった。

エセル どうしてそんなに早く行くの？

セルロ 君の尊敬すべきお母さんから君をあきらめろってそれとなく注意されたんだ。

エセル どういうこと？

セルロ いいかい、お互いフランクになろうじゃないか。

エセル いつもフランクじゃないの？

セルロ ええっ、君が僕にそれを単刀直入に聞いているんだったら、答えは「全然」だね。

エセル それなら、今すぐフランクになりましょうよ。

セルロ じゃ言うけど、十日前は君の家族が僕にべたべたしてた。僕と同じように君にも理由が分かっていると思うんだ。

エセル そんなこと、話す必要があるっていうの？

セルロ フランクになるのって、結構難しいね。

エセル そんなことないわ。どうぞ、続けてちょうだい。

セルロ 一日中「ねえセルロ卿」で、僕に飽きることがなかった。「素敵ない人、セルロ」ってね。正に義理の息子として迎えたい男みたいだった。

エセル セルロ卿ったら！

セルロ 半月になるけど、僕はまだそうなっていない。すごくお似合いの結婚とかいうことになるよ、その若い女性だけがどうあっても僕じゃ我慢できないかったんだ。

エセル どうしてそんなこと言うのか分からないわ。

セルロ 決着をつけた方がいいよね。心にわだかまりがあるのはよくないから。その若い女性を責めはしない。僕が頬を赤らめるような少女だったら、自分がとても自惚れているということが分からないからね。誰にでもお金があるという訳じゃない。来る途中で少しばかりダメージを受けたんだ。えっ、何かあって？ 一つ二つスキャンダルに巻き込まれたんだ。昔からの侯爵にとつていいことではない。酒飲みの傾向があつてね。彼に害はないよね、でも、君が残りの人生と一緒に送りたいと思うような男ではない。若い女性にも自分なりの考えがあつた。一ポンドのお茶で結婚するなら受け付けないということ、その高貴な貴族に分からせてやる。「よかろう、なかったことにしよう」と高貴な貴族は言う。「とんでもないわ」と若い女性の母

親は言う。五十万ポンドはもらい手がなくなる。君に慣れる時間を母親に上げるんだ。本当は魅力的な男なんだ。君のことを知れば知るほど、母親は君のことが好きになるだろう。この地方に来て泊まるんだ。

エセル 「笑って」 どうしてそんな馬鹿なことが言えるの？

セルロ 「よろしい、わたしの出番だ」と高貴な貴族は言う。「すぐ素敵な娘だ」とか何とか。高貴な貴族はいささか魅了される。彼女が自分を受け入れてくれたら、心を入れ替えよう——腐りきったことは全部やめて、彼女のいい夫になろうと思う。それどころか、結婚生活のことを考えるのに心を奪われる。馬鹿に見えるかもしれないが、高貴な貴族はいい物を見れば分かるし、若い女性ほとんど彼が今までに見つけた最高の物なんだ。

エセル もしかして、真面目に話してるの？

セルロ 今は邪魔しないで。僕はちようどしっかりと安定した駆け足に入ったところで、これから言いたいことを全部言っすっきりしようとしているんだ。ごめんさい。

セルロ とところで、結婚相手にふさわしい侯爵がこの地方に来たら、どういうことに気がつくと思う？ この場に外国の王子がいなければ幸いだということだ。全く、それだけで高貴な貴族の貴族的な鼻をくじくのに十分だよね。「いいかい、君、警戒を怠っちゃいけない」とか何とか、高貴な貴族は自分で言い聞かせる。馬鹿みたいだよね。でも、ひどい嵐がやって来る時に、どつちに風が吹いているか分かるからね。兄弟はいささか冷ややかで、父親もいささか冷ややかだけど、母親は完全に冷たいものだ。「よしとしよう。でも、かわいいポリーはどうなんだ？」と高貴な貴族は自分に言い聞かせる。

エセル もしかして、わたしのことかしら？

セルロ この一か月、かわいいポリーは高貴な貴族を自由自在にあしらって背を向けるだけだったけど、急にえらく優しくなった。「おいおい、どうなってるんだ、これは」と高貴な貴族は言っつて、小さなハートをドキドキさせている。彼は馬鹿かもしれないが、大馬鹿ではないし、一日、二日で悟る。だから、賢い人間のように、荷物をまとめてずらかるんだ。

エセル 一体何を言ってるのか、分からないわ。

セルロ そうかい？ じゃあ、言葉通りに取らないの？

エセル わたしたち、完全にフランクになることに同意したわ。

セルロ 分かった。騙しっこなした。ねえ君、僕に分かっていたのは、正に君が愚かにもすっかり大公に魅了されて、取るに足らないネツド・セルロには到底チャンスがなかったということだ。

エセル それは違うわ。

セルロ そう、いや、違わないよ。いいかい、僕自身が愚かにもちよつと魅了されて、それで君がえらく分別臭くなるんだ。

エセル あなたたったら！

セルロ

いいんだ、君が立ち上がる必要はない。もう君にプロポーズする気はないんだ。全く無駄なのは分かっているから。最初は全然気にしなかった。正にビジネスの取り決め——片方に五十万ポンド、もう片方に古くからの侯爵の爵位ということだった。でも、今は……。ええと、君も知ってる通り、僕が言いたいことを言うと、馬鹿みたいなんだ——本気で言う時はね。

エセル

ごめんなさい。わたし、あなたに対して思いやりがなかったかもしれないわ。

セルロ

いや、違う、そんなことはないよ。僕が全くつまらない無作法者に見えるよね。

エセル

いいえ、あなたはすごくいいお友達だと思うわ。

セルロ

そう言ってくれて嬉しいよ。あのね、僕は君の家族には我慢らないんだ。君は？

エセル

「微笑みながら」あのね、わたしは家族が金持ちになる前から知っているのよ。一生涯不潔な狭い通りに住んでいたら、うちのような巨万の富を持つのはとても難しいわ。

セルロ

君は家族のことは大目に見るけど、僕には決してそうじゃなかった。

エセル

そんなことしたら、おこがましかつたでしょ。

セルロ

爵位以外に生計の手段を持たない侯爵でいるのはひどくつらいということが、君には全然思い浮かばなかったんだ。爵位の一番よくないところは、爵位は信用を十分もたらすけれども、現金をほとんどもたらさないことなんだ。

エセル

そんなこと思ってもみななかったわ。

セルロ

ねえ、いいかい、僕が言いたいのはこうなんだ。大公のことなんか僕の知ったことじゃない。あのね、王族のことはよく知らないけど、目が素敵で大金を持っているからと言って、外国の王子がことさら誰ということもなない人の娘とは結婚しそうも無いと思うよ。「エセルが話そうとする。」いや、話しを続けさせてくれ。君がつまらない時間を過ごすことになるかもしれないけど、ただ僕が君に知ってもらいたいのは、いつでも君が僕を望むなら——ねえ、僕が言いたいこと、分かるよね。君が相続人で僕が古くからの侯爵だということは忘れようよ。君はすごく素敵な子で、僕はただのネッド・セルロなんだ。僕は悪い人間でもないし、多分、僕たちは一緒に幸せになれるよ。

エセル

「感動して」あなたってとても素敵ね。今までよりもあなたのことがよく分かって、とても嬉しいのわ。たとえ何があってもあなたに頼れるって分かるもの。

セルロ

それならいいんだ。それまでの間、高貴な貴族はずらかって——危なくなないように、男らしく耐えるつもりだからね。

ジャック・ストローが入ってくる。

ジャック・ストロー さて、天気と収穫はいかがかな？

セルロ 「あつけにとられて」そんなこと知るもんですか、閣下。

ジャック・ストロー 君たちがそれを話し合っていたように見えたから聞いたままだ。

ジャック・ストローはセルロをちらつと見る。セルロは動く気配を見せない。

ジャック・ストロー 君を追い払うことになってないよね？

セルロ 「立ち上がりながら」全くそんなことはありません、閣下。パーティーを

見に行こうと思っていました。

ジャック・ストロー ちょうどよかった。行ったらわたしのふりをして、あのいまいましい連中と握手してくれたまえ。芝生の上にはレッドカーペットがちょっとしかないから、わたしがどこにいるのがいいか、君にも分かるだろう。

セルロ わたしじゃ無視されるかもしれませんが、閣下。

出て行く。

ジャック・ストロー 王室の人間であることに見出せた唯一の利点は、誰かが邪魔になつた時に「下がれ」と言うだけでいなくなってくれることです。

エセル どうしてセルロ卿にいなくなつて欲しかったんですの、閣下？

ジャック・ストロー あなたと二人だけになりたかったからです。もっと聞いてください、さあ。

エセル わたくしは母がお客様を迎えるお手伝いをしなくてもよろしいのでしょうか？

ジャック・ストロー 確かにすべきだと思います。でも、いいですか、王室の人間であることのもう一つの利点は、わたしが「行つてもいい」と言うまであなたに行くことができないことです。ところで、パーティーなんか嫌いなんじゃないんですか？

エセル 大嫌いですわ。

ジャック・ストロー わたしもそうなんです。パーティーなんかないことにしましうよ。さあ、座つて楽にしたらどうですか？

エセル ちょっとお話しをしたいと思います、閣下。

ジャック・ストロー それは素敵だ。あの連中を全員追い返すためにあそこに兵隊が一個連隊いればいいのだが。

エセル 言いたいことを申し上げてもよろしいかしら、閣下。

ジャック・ストロー おや、もちろん。

エセル 十六になるまで、わたくしがそれまでに会つたことのある一番身分の高い方はロンドン市議会議員でした。わたくしが王族の方々に対する行儀作法を知っているかどうか、今一つ自信がありませんの。



ジャック・ストロー 一体どうして行儀作法の本を買わないの？ わたしはいつも一冊持ち歩いています。

エセル 閣下がお越しになるとおっしゃった時に、母がいくつか買いました。

ジャック・ストロー わたしと同じのを持っていないかな。わたしは「サービエット」を「ナプキン」と言うのが全然思いつけなくてね。

エセル ママはそういうことにとってもやかましいんです。

ジャック・ストロー それと、いいかね、絶対に「チキン」を「鶏肉」と言っちゃいけないのを知ってるかな？ それは実に無作法なことです。お母さんの本にもあるかな。おや、あなたは何て素敵な目をしているんだらう。

エセル 王族の人間であることのもう一つの利点は、素敵なお話をなさっても、真面目に取る人がいないことですわ。

ジャック・ストロー でもね、わたしは全く取るに足らない王族の人間です。わたしのことを何か本当に偉い人間だなんて思わないでいただきたい。

エセル そう言っていたらとてもありがたいです。

ジャック・ストロー いいですか、ポメラニアには男の大公と女の大公が七十九人いるんです。わたしの祖父には子供が十七人いて、みんな結婚しました。わたしたちが七十九人になるためには、それぞれが子供を何人作らなければなりませんでしょうか？

エセル とても難しそうですわ。

ジャック・ストロー でも、わたしが大して重要でないことは分かるでしょ？ それに、当然のこととして、実際問題わたしには口にするほどのお金がありません。

エセル 気を楽しませてくださってとてもありがたいです。それなら、わたくしが言いたいことをそのまま言わせていただいてもよろしいでしょうか？

ジャック・ストロー わたしに耳の痛いことなんか言いませんよね？ わたしには親戚が七十九人いて、みんなが耳の痛いことを言うんです。

エセル あえて言うようなことはありませんわ。

ジャック・ストロー ほかのことならあなたに何を言われても毅然として耐えますよ。我々の触れ込みは、あなたはただの何とか嬢ということにします。

エセル 実際問題として、わたくしはそうですわ。

ジャック・ストロー そして、わたしは——ジャック・ストローということにします。エセル 「驚いて」一体どうしてジャック・ストローなんですか？

ジャック・ストロー 「気にせずに」ハムステッドにあるパブの名前です。どうぞ話しを続けてください。

エセル あなたが私の大きな願いを聞いてくださるかどうかわかりませんでした。

ジャック・ストロー ないものねだりをしてください。そうすれば、明日の朝カーター・パターソンが正面玄関の前に置いてくれますよ。

エセル それよりもずっと簡単なことですわ。

ジャック・ストロー 早いとこ気をもむことから解放してください。

エセル とても感謝いたしますわ——ここから出て行っていただけましたら。

ジャック・ストロー 「非常に驚いて」わたしが？ 今ですか？

エセル 今の今ということではありません。でも、もし明日出て行っていただくのがご都合よろしければ……。

ジャック・ストロー わたしに完全に出て行って欲しいとおっしゃるつもりじゃありませんよね？

エセル わたくしが言いたいのは正にその通りなんです。

ジャック・ストロー 何かもっと簡単なことをねだることはできなかったんですか？ 絶対に嘘をつかない弁護士をねだってください。そうすれば、手足を縛って届けますよ。

エセル たまたま今この瞬間は欲しくありませんの。ありがたいですけど。

ジャック・ストロー でも、わたしはここでとても楽しく過ごしているところなんです。

エセル 「語気を変えて」あなたが毎日わたくしにこれ以上ないくらい残酷に恥をさらさせているのがお分かりにならないの？

ジャック・ストロー わたしは自分が楽しんでるつもりでした。

エセル 全くもう、分からないふりなんかしないで。わたくしは、母があなたをはめようとしてちよつとしたわなをしかけた時に、あなたの目が輝くのを見ることがあるわ。

ジャック・ストロー わたしはいつだって実に見事にわなにはまっていました。

エセル でも、母がわたくしをあなたと結婚させたい素振りを見せていることをあなたがどれだけはつきり分かっているか知った時に、わたくしがどう感じたかご存じなの？

ジャック・ストロー 自分と結婚したい素振りを見せるかわいい子がいるというのは、実に愉快的な感じですよ。

エセル あなたにとってはただの冗談でも、わたくしがどんなに恥ずかしい思いをしているか、あなたはご存じないんです。

ジャック・ストロー でも、どうしてわたしがタバナーくんだけまでやって来たと思えますか——あなたのお父さんとお母さんに会うためだけでも？

エセル どうして来たかなんて知りません——わたくしを絶望的なくらい不幸にするためでないかぎり。

ジャック・ストロー あなたに一目惚れしたから来たと言ったら何て言いますか？

エセル 「殿下は思いやりのある方ですね」って言うでしょうね。

ジャック・ストロー 今は、どうかな、わたしは結構素敵だと思いませんか、本当のところ？

エセル そのようなことに何か意見を持つなんて、間違いなく差し出がましいことですよ。

ジャック・ストロー 友人のセルロなら、「こりゃ一本取られた」って言うでしょうね。

エセル 母のお客様のところへ戻らせていただけますか、閣下？

ジャック・ストロー 「平然として」わたしが大公でなかったら、少しは好きになったと思いますか？

エセル そんなこと、考えたこともありませんわ。

ジャック・ストロー それなら、どうかすぐ考えてみてください。

エセル それでも、あなたのことが好きになったのは確かですわ。

ジャック・ストロー もしわたしがただの文無しの冒険家だったとしても、あなたがわたしを实际好きになったのは間違いありません。

エセル そんなに強く言ったつもりはありませんわ。

ジャック・ストロー あのね、あなたはもう少ししようもなくロマンチックなんじゃないですか。あなたはわたしを好きだと認めました。それなのに、わたしがそのつもりもないのにたまたま皇帝を祖父に持っているというだけで、わたしが出て行くことを望んでいる。随分無茶な話だ。

エセル でも、そんなこと認めてませんわ。

ジャック・ストロー わたしは、わたしに出て行けというあなたの要求を、永遠の情熱を公言したのも同然のことだとみなしています。

エセル あなたが大公でなかったらわたしはどう言ったか、お話ししましょうか？

ジャック・ストロー ええ。

エセル あなたはわたしは今まで会った中で一番厚かましくて恥知らずで失礼な人だって言いましたわ。

エセルは素早く皮肉っぽく膝を曲げて会釈して出て行く。ジャック・ストローが行きかけると、ウォンリー夫人とホーランドが入って来る。ジャック・ストローは立ち止まって二人と握手する。

ジャック・ストロー そうだ、会いたいと思っていたところなんだ。君からちょっとした手紙をもらいましたね、ホーランド君。

ホーランド 「皮肉っぽく」失礼ながら、二、三分個人的にお話しができないか伺いたかったもので。

ジャック・ストロー もしよかったら、ここで待っていてくれませんか。すぐに戻って来ますから。

ジャック・ストローは出て行く。

ホーランド ねえ、彼は全くよそよそしいね。

ウォンリー夫人 素晴らしいと思うわ。一瞬たりとも疑われっこないわね、彼がただの……。

ホーランド 気をつけて。

ホーランドは周りを見る。

ウォンリー夫人 ここには誰も来ないわよ。全く安心して話ができるわ。

ホーランド こんな馬鹿なはずらを思いつかなければよかった。いろいろと面倒なことになるのは分かっていたのに。

ウォンリー夫人 今更言っても無駄だわ。わたしたちはできるだけ冷静さを保って手を引くしかないのよ。

ホーランド あなたはどうするつもりですか？

ウォンリー夫人 まあ、いかにも男の人らしいわね。全部の責任をわたしに押し付けようとするんだから。「あなたは どうするつもりですか？」だなんて。

ホーランド それなら、できるだけ早くおしまいにしなければ。

ウォンリー夫人 たとえ何があっても、ひと騒動あっちゃいけないのよ。あの人が人前で恥をかくのを見るのは耐えられないわ。

ホーランド 一体どうしてあなたは彼のことを言い出すんですか？

ウォンリー夫人 ああ、わたしはとんでもない馬鹿なの、アンブローズ。

ホーランド ねえ、どういうことですか？

ウォンリー夫人 何にしても、わたしは若い娘じゃない——ものすごい食欲のある健康な男の子二人の母親なのに。あの人に惹かれてしまったみたい。

ホーランド 何てことだ！

ウォンリー夫人 そんなこと言っても無駄よ。当然のことながら、あの人はわたしが今まで会った中で一番魅力的な人なんですよ。

ホーランド 本気で彼に惚れたって言うんじゃないですよね？

ウォンリー夫人 ユーモアのセンスがある未亡人は、誰にも決して本気で惚れないものよ。

ホーランド それで？

ウォンリー夫人 でも、あの若者は現れた時と同じようにミステリアスに消える方がずっついと思うの。

ホーランド 全く同感ですね。ごく率直に彼にそう言いましたよ。

ジャック・ストローが入って来る。

ジャック・ストロー さあ、ご両人、ご用を承りますよ。

ホーランドとウォンリー夫人は座っている。ジャック・ストローが

ホーランドを見ると、ホーランドは不安そうに立ち上がる。

ホーランド 全く、そんな馬鹿なまねはやめるんだ、ジャック。

ジャック・ストロー 「よそよそしく」何ですって。「間を置く。」よろしければ、わたしの帽子を置いていただけませんか。

ホーランドはジャック・ストローの帽子を受け取って、不機嫌そうに椅子の上に投げつける。

ジャック・ストロー 今日のは午後はあまり機嫌がよくないみたいだね、ホーランド君。

君のマナーにはいささか不満な点があるときえ思う。

ホーランド いいかい、こんな馬鹿なまねはもう十分だ。

ジャック・ストロー どうか座りたまえ。君が立っているとストレスを感じるんだ。

ホーランド この男は正気じゃない。

ウォンリー夫人 「愛想よく」あなたに素晴らしく合ってたボーイの制服を忘れてしま

まったの、ストローさん？

ジャック・ストロー 「平然として」きれいさっぱり。奥方からおかしな提案を受け

た時、ご親切にも認めていただいた条件しか覚えていません。

ホーランド でも、いいかい、この件に決着をつけなければいけないんだ。

ジャック・ストロー 喜んで話を聞くよ、ねえホーランド。君の話は大抵面白いし、

時として機知に富んでいるからね。約束して欲しいのは、君の地位の人間とわたしの地位の人間との間に通常交わされるような形の礼儀を尽くしてもらいたいということだけだ。

ホーランド どんなことになるか分かっていたら、わたしは絶対にこんな馬鹿なことに賛成しなかっただろう。ジェニングズ夫人が無防備な若い女性に対してこれ以上ないくらい横柄に振る舞ったから、我々は苛立ちまぎれに抑えきれず夫人を罰しようと思ったんだ。やってみても損にならなかった。多分夫人が君を夕食に呼んで、それで終わるだろうと思っていた。君がここに来ていつまでも泊まるなんて、我々には分からなかった。

ジャック・ストロー ねえ君、君の知性が欠如しているからといって、どうしてわたしに責められなければいけないのかね？

ホーランド 「苛立って」くそっ！

ジャック・ストローは場所を変えてウォンリー夫人の側に座る。

ジャック・ストロー 我々の友人は全く支離滅裂ですよね。

ウォンリー夫人 わたしたちはあなたに出て行っていただきたいの、閣下。

ジャック・ストロー そうなんですか？ 全く、何て素敵なワンプイスなんだろう。

どこで手に入れたんですか？

ウォンリー夫人 「ジャック・ストローの厚かましさにちよつと苦笑ながら」あなたの魅力には完全に負けるわ。

ジャック・ストロー わたしが言おうとしていることを先に言われてしまいました。

今あなたが言ったのが、ちよつどわたしが言おうとしていたことなんです。

ウォンリー夫人 あなたが真面目なことであるのかしら？

ジャック・ストロー 美しい女性と話す時はいつだって。

ウォンリー夫人 あなたのことが理解できるといいんだけど。

ジャック・ストロー あのね、わたしはこの三十年余り自分を理解しようと努力して

きました。そう言えば、わたしはいくつなんだっけ、ホーランド？

ホーランド 一体どうしてわたしに分かるんだ？

ジャック・ストロー だとすると、ねえ君、君は実に軽率だと思うよ。それを考えておいてくれてもよさそうなのに。誰かに年を聞かれたらどうするのかね？

ウォンリー夫人 あなたが本当に王室の人だったらよかったのに。  
ジャック・ストロー ボーイに王室の人間の扱い方をよく心得ておけといっても難しいですよね。

ウォンリー夫人 「ひそひそと」あなた、本当は誰なの？

ジャック・ストロー あなたの忠実なしもべですよ、奥方。あなたと知り合って十分もすれば、それ以外にはなれません。

ウォンリー夫人 そんなこと言ってくださるなんて、素敵だわ。

ジャック・ストロー わたしはとても素敵ですよ。

ウォンリー夫人 素敵過ぎるわ。ですから、殿下にはご出発いただくよう丁重に願います次第ですの。

ジャック・ストロー ねえ、あのワンピースをどこで手に入れたか、まだ教えてもらっていませんよ。

ウォンリー夫人 あら、パリで買いましたの。あれが好きなの？

ジャック・ストロー あれは素敵だ。それに、あなたにぴったり似合っている。

ホーランド イザベル、イザベル、我々がここに来たのは分別のある行動をするためですよ。

ウォンリー夫人 ねえアンブローズ、わたしのやり方で分別のある行動をさせてちょうだい。

ジャック・ストロー そうだ、ねえホーランド、わたし用のレッドカーペットがまだあの場所にあるかどうか見に行ってくれないだろうか。

ホーランド 君に馬鹿にされるつもりはないよ。

ジャック・ストロー どうして？ 君は実によくやってくれている。

ウォンリー夫人 ブーブー言わないの、アンブローズ。

ホーランド 一体わたしにどうしろと言うの？

ウォンリー夫人 すぐのどが渴いて死にそうなの。レモネードを一杯持って来てちょうだい。

ホーランド この場所から動くつもりは毛頭ありませんよ。

ジャック・ストロー この一週間、もしわたしが誰かに解雇を通知して、その人間が行くのをにべもなく拒絶したら、どうしたものかと考えてきました。実に困った問題ですよ。

ウォンリー夫人 その問題に「マホメットと山」の故事（マホメットが奇跡を求められ、山を呼び寄せようとしたが、山が動かないのを見て、「わたしの方が山へ出掛けて行こう」と言ったという話。やむを得ない事情のため方針を変えなければならぬ場合に使う。）が入り込む余地はありませんね。

ジャック・ストロー もちろん、百年前ならその人間を地下牢にぶち込みました。でも、ここだけの話ですが、たまたま地下牢が手元にないもので。

ホーランド もういいだろ、こんな馬鹿なことはもう十分だ。いたずらは十分うまくいった。君は行くのか、行かないのか？

ジャック・ストロー はて、単刀直入にお尋ねなら、行きません。

ホーランド でも、分らないのか、わたしが二言言いさえすれば、召使が君をこの家から蹴り出すんだぞ。

ジャック・ストロー わたしと一緒に間違いなくあなたも蹴り出されるのをお忘れだ。ホーランド もういいだろ、ジャック、我々は昔からの友達で、一緒に悪運をくぐり抜けてきた。君にひどいことは言いたくない。自分が馬鹿なことをやったのは分かっているが、君はちゃんとした奴だ。君がすぐに出て行く必要があるのを分かってくれよ。

ジャック・ストロー そんなことはどうしたって分かりっこない。ほかに約束はないし、一年のこの時期、この地方は素晴らしい。

ホーランド 君の振る舞いはよくあるペテン師みたいだ。

ジャック・ストロー 王室の人間に向かって何という言葉を使うんだ！ 間違いなく、我々はそういう率直さに慣れていないんだ。

ホーランド 君が出て行くのを断るのはわざとなのかね？

ジャック・ストロー そうだ。

ホーランド だとしたら、その理由を言おうか？

ジャック・ストロー わたしもたまたま知っているが、ご苦勞様。

ホーランド 君は生涯で一番みつももない行動をするつもりなんだ。君がエセル・ジエニングズに首つたけだって、誰にも分からないとでも思っているのかね？

ウオンリー夫人 「跳び上がって」本当なの？

ジャック・ストロー その通り。

ウオンリー夫人 それなら、どうしてあんなにみつもなくわたしを口説いたの？

ジャック・ストロー 本当はそうするつもりはなかったんです。あれは不適切な態度に違いありません。

ウオンリー夫人 あれは全くもってあなたを未亡人との面倒なことに巻き込みするような不適切な態度だわ。

ジャック・ストロー その場合は、できるだけ早く結婚するというわたしの決意にあなただが大喜びするしかありませんね。

ホーランド エセル・ジエニングズじゃなくて？  
ウオンリー夫人 冗談でしょ？

ジャック・ストロー ねえ奥方、わたしが冗談を言う時はいつもすぐ笑います。それでその疑問はなくなりますからね。

ホーランド 馬鹿げてる。そんなことをさせておく訳にはいかない。

ジャック・ストロー ねえ君、そんなことにひどく興奮したって何にもならないよ。ましてや、まだあの若い女性にプロポーズしていないんだから。

ホーランド 君は完全に気が狂っているに違いないと思う。君がそんなひどいペテンをやるのを我々が許すなんて、君だって全く思わないはずだ。どうして君がそんなに無情で残酷なことを思いつくのかさえ、わたしには想像できないね。

ウオンリー夫人 それはやり過ぎだわ。そんなの無理だということが分からなければ。お願いだから、すぐにタバナーから出て行ってちょうだい。

ジャック・ストロー あなたはどんなささいな気まぐれでも断らなければならぬとなると、心が乱れるが、今回は「ドラマチックな身振りで」あとへ引けないのだ。

ホーランド もう、いいだろ、我々は十分話し合った。君がすぐにこの場所から出て行くか、わたしがジェニングズ夫人にすべてを話すかだ。

ジャック・ストロー あなたにその満足感を与えるのがフェアというものです。それは我々の取り決めの一部でした。

ホーランド 君にことの重大さが分かるのか？

ジャック・ストロー 「非常に愛想よく」この計画に加わる前から分かっていました。

ホーランド わたしの取るべき道は一つしかない。

ジャック・ストロー ねえホーランド、真実を明らかにするのは確かにあなたの義務ではあるけれど、あなたはそのことにいささか神経質になっているとわたしは本当に思う。

ホーランド 君のためを思ってもう一度聞くよ。この家から出て行って、いかなる状況でもここの家族の誰とも連絡を取らないと誓えるかね？

ジャック・ストロー もう一度チャンスを与えてあげよう。わたしはエセルにぞつこんで結婚することを固く決意していると繰り返すことしかできないね。

ホーランド 君が死んだって、君の責任だ。

ジャック・ストロー 死ぬ時は死ぬさ。

ホーランドはドアのところまで行く。

ウオンリー夫人 だめ、アンブローズ、お願いだから、やめてちょうだい。

ホーランド 全く、あなたがジェニングズ夫人を負かして喜ぶ機会を得るために、すべてのことが行われたんです。今、そのチャンスが来るといふのに。

ウオンリー夫人 でも、もう必要ないの。馬鹿なことだったわ。彼をすぐ行かせてあげて。

ホーランド でも、ほら、彼は行こうとしない。

パーカー||ジェニングズ夫妻が入って来る。

パーカー||ジェニングズ夫人 あら、殿下じゃありませんか、あちこち探していましたのよ。どうなさったのか分かりませんでしたわ。

パーカー||ジェニングズ この地域の全員があそこにはいます。一流の人たちです。

ビンセントが慌てて入って来る。



ビンセント やあ、お母さん、一体何をやってるんですか？ 急いでください、侯爵夫人がちょうど車で着いたところですよ……。おや、申し訳ありません、閣下。いらつしやるのが分からなかったもので。

ホーランド ビンセント、エセルを連れて来てくれ。彼女に聞いてもらわなければならぬ大切な話があるんだ。

ビンセント でもですね、侯爵夫人がちょうど……。

ホーランド もう、侯爵夫人なんかどうでもいい。エセルはどこかね？

ビンセント すぐ外に座って、セルロと話しています。

ホーランド それなら、呼びなさい。

パーカー||ジェニングズ夫人 「びっくりして振り向きながら」何かあったんですか？

ビンセントは出て行き、すぐにエセルとセルロと一緒に戻って来る。

ウォンリー夫人 「ホーランドに向かって」アンブローズ、穏やかにね。

パーカー||ジェニングズ 殿下にご迷惑なことはありませんか？

パーカー||ジェニングズ夫人 「とっさに」そうね、失礼がなかったらよろしいのですけど。

ジャック・ストロー 気に障ることは何もありませんでした。わたしはもうこれ以上なくらい上機嫌です、ありがとうございます。

ホーランド 「エセルを見ながら」やあ、来たね。「ほぼ全員に話しかけながら」非常に言いにくい話があつて、みなさんにどう説明したらいいのか分からないのですが。

セルロ あの、それはわたしと関係のあることですか？ わたしははずしませうか？

ジャック・ストロー いやそんな必要はない、どうかいてくれたまえ。

ウォンリー夫人 「ジャック・ストローに向かって」気持ちは変わっていませんの、閣下？

ジャック・ストロー わたしは、今名前を思い出せないが、歴史上の人物と同じ考えです。決して気持ちを変えません。

ホーランド ジェニングズ夫人、わたしが言い訳をしようとしても無駄でしょう。できただけ手短にお話しした方がいいんです。

パーカー||ジェニングズ夫人 ホーランドさん、それはもつとあとまで待つ訳にはいきませんか？ 侯爵夫人がちょうど着いたところで、あたくしが迎えに出ないと、とても変に思われますわ。

ジャック・ストロー ホーランド君が伝えることは、間違いなくあなたにも興味のあることです。

パーカー||ジェニングズ夫人 ええ、もちろん、殿下がお望みなら。

ホーランド 多分、みなさんは二週間前にグラント・バイロン・ホテルで全員が会ったのを覚えておいででしょう。

パーカー||ジェニングズ夫人 どうして忘れましようか、あれは殿下に紹介していた  
だいたおめでたい日ですもの。

ウォンリー夫人 アンブローズ。

ホーランド アボット夫妻がラウンジでわたしたちと一緒に座っていたのも覚えてお  
いででしょう。

パーカー||ジェニングズ夫人 あたくしには、アボット夫妻がどこに座っていたか思  
い出すよりもほかにすることがあるわ。

ホーランド 多分、あなたは彼女に対してとても残酷に振る舞ったのをお忘れなん  
でしょう。わたしたちはみんなとても憤慨しました。あなたを罰する必要が  
あると思いました。

パーカー||ジェニングズ夫人 本当に、ホーランドさん、あたくしにはあなたが誰に  
話しているつもりなのか分からないわ。

ホーランド わたしが言うべきことを言うのは実に難しくって——今はすべての事柄が  
笑えるくらい馬鹿げていたのが分かります——あなたが邪魔しなければず  
っとうまくやれるんですが。

ジャック・ストロー どうか彼に続けさせてやってください、ジェニングズ夫人。

パーカー||ジェニングズ夫人 あら、もちろん、殿下がお望みなら、もうこれ以上言  
うことはありませんわ。

ホーランド 無名の人間を大重要人物だと偽って通したら面白いだろうと思いついた  
んです。ちようど、ボーイの一人がわたしの昔からの友達だと気がついた  
ものですから。わたしはあなたにその男をポメラニアのセバスチャン大公  
だと言って紹介しました。

パーカー||ジェニングズ夫人 何ですって！ じゃあ……？

パーカー||ジェニングズ夫人は言葉を失う。セルロは大声で笑い出  
す。次の四つのセリフは素早く、ほとんど同時に発せられる。

セルロ かつがれたんだ！ 全く、何というペテンだ！

パーカー||ジェニングズ夫人 「ジャック・ストローに詰め寄りながら」あなたは違  
うって言うの……。

ビンセント 彼を見た時に知ってる顔だと思ったんだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 言うのよ、あなた、言っちょうだい。

ジャック・ストロー 「これ以上ないくらい優雅に」奥方、わたしはグラランド・バイ  
ロン・ホテルのボーイの制服から脱け出して、あなたが今目の前に見てい  
る人物の地味な衣装に入り込んだのです。

パーカー||ジェニングズ夫人 それなら、あなたは全くのペテン師じゃない。ああ！  
もう！ さあこうなったら、ジェニングズ、あなたは男でしょ。何とかし  
てちょうだい。

パーカー||ジェニングズ その上、一週間の間、昼食と夕食でわしの一番いいシヤン  
パンを飲み干していたんだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 もう、シャンパンなんか糞食らえだわ。

ピンセント お母さん！

パーカー||ジェニングズ夫人 全く、あなたは馬鹿よ、馬鹿だわ。教養があるのに。

オックスフォードに行かせて、年四千ポンドも上げたんだから。大公とボーイの違いが言えるだけのことを習わなかったの？

ピンセント セルロだって見抜けなかったんですよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 セルロが何様だっていうの？ 結構な侯爵様なこと――

――年がら年中馬丁やウエートレスと過ごしていて。どうして侯爵だなんて分かるのよ？

セルロ ほっといてください。

パーカー||ジェニングズ夫人 何とかできる人はいないの？ あの男は毛玉ほども気にしないで、そこに立っているのよ。安心してちやいけないわ、あなた。

こっちは呼び名が「殿下」で、あっちは本当の「殿下」なんだから。あなたくしたちは本物を「閣下」と呼ばなければいけない。ボーイさん、ビール半パイントね、ちんたらしないの。

エセル お母様！

パーカー||ジェニングズ夫人 ああもう、あたくしに話しかけないでちょうだい。「ジ

ヤック・ストローに対して」さあ、何か言いたいことはあるの？

ジャック・ストロー ねえ奥方、あなたはよくしゃべるから、わたしが口をはさむのは難しいでしょうね。

パーカー||ジェニングズ夫人 じゃあ、聞くわよ。

ジャック・ストロー おや、これは参ったな。実際のところ、適当な言葉が思い浮かばないもので。

パーカー||ジェニングズ夫人 あなたはずっとあたくしのことを笑っていたんでしょ？ でも、今度は泣くことになるわよ、あなた。

ジャック・ストロー どのようにしてあの実に奇妙な計画を実行するのか目の当たりにすることには興味を覚えますね。

パーカー||ジェニングズ夫人 では、誰が見せるのか、言いますしうか？

ジャック・ストロー ええ、どうぞ。

パーカー||ジェニングズ夫人 警察よ、あなた、警察。

ジャック・ストロー わたしだったら、警察は呼びませんね。

パーカー||ジェニングズ夫人 あなたは呼びませんって言うの？

ジャック・ストロー わたしは本当に呼びませんよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 じゃあ、あたくしが呼ぶわよ。

ジャック・ストロー この人たちがみんなここにいて、ちよつとみっともないと思いませんか？

ピンセント 今、ひと悶着起こす訳にはいきませんよ、お母さん。

パーカー||ジェニングズ夫人 黙っておとなしくしてろって言うの？

ジャック・ストロー 助言を求められれば、わたしもそれをお薦めしますね。

パーカー||ジェニングズ この地方の人たちが全員ここにいるんだよ、マリア。一流の人たちだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 ああ、全員死んでたらしいのに。あの人たちがここに来た理由は分かっている。あの人たちが陰であたくしのことを下品なオバサンと呼んでいるのを、あたくしが知らないでも思うの？ だけど、それでもあたくしが二百万ポンドのお金を手に入れたから、あの人たちは来たのよ。あたくしが金持ちだから、あの人たちは来ない訳にいなかったんだわ。

ジャック・ストロー いいですか、わたしはお高くとまっていると思われたくはありませんが、実際問題、あの連中は今日わたしに会いに来たんです。わたしが出て行って愛想よくした方がいいとは思いませんか？

ホーランド 君がああ連中のところに戻ろうって言うんじゃないよね？

ジャック・ストロー いけませんか？

パーカー||ジェニングズ夫人 あたくしがあなたを公爵夫人に紹介しなきゃならないの？

ジャック・ストロー それを忘れないで必ずやってくれるかどうか心配ですが。公爵夫人だって、王室の人間には目がありませんから。

パーカー||ジェニングズ夫人 公爵夫人に見つかりでもしたら！

ジャック・ストロー この状況にはユーモアの要素がない訳でもありません。

パーカー||ジェニングズ夫人 まあ、驚いた、ずうずうしいこと。

ジャック・ストロー わたしの紋章の題銘は「勇敢」です。ただし、ラテン語になっていますが、それはその方が響きがいいからです。

ビンセント あなたの紋章、わたしは好きです。

ジャック・ストロー ねえ君、君のと同様、本物であることは間違いないんだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 だからって、あたくしに何も知らないふりをしろって言うの？

ジャック・ストロー そうするしかないと思いますね。

パーカー||ジェニングズ夫人 そんなことできないわ。二度と威厳を保てなくなるもの。

ジャック・ストロー いらっしやい。公爵夫人がいらいらしているに決まっています。

わたしが侯爵夫人の耳にちよつとばかり恋を囁きますから。

パーカー||ジェニングズ夫人 まあ、そうね、一か八かやってみるしかないみたい。

でも、ちよつと待って、あなた、待つよ。

ジャック・ストロー お約束できると思いますよ。ここにいる人間は誰も——秘密をばらさないって。

パーカー||ジェニングズ夫人 おやまあ、あたくしが犯罪者みたいな言い方ね。

パーカー||ジェニングズ夫人は行きかけるが、突然止まって叫ぶ。

ホーランド どうしました？

パーカー||ジェニングズ夫人 ええ、はっとしたの。さて、どうしましょうか？ 伯爵よ。

ホーランド どういうことですか？

パーカー||ジェニングズ夫人 あの方のことをすっかり忘れていたわ。フォン・ブレ

マー伯爵が来るのよ。

ジャック・ストロー 誰ですか、一体、それは？

ホーランド 君の国の大使だよ。

ジャック・ストロー そうだった、わたしは何て馬鹿なんだ！

ウォンリー夫人 「ちよっと軽蔑するような笑いを浮かべて」でも、あの方は来ない

わ。

パーカー||ジェニングズ夫人 過信しちゃいけないわ。あの方が来るのは確かよ。イ

ギリスの貴族は本当に喜んでパーカー||ジェニングズ家と親しく交際したけど、この汚らしい外国人はあたくしたちとは比べものにならなかったでしょうね。そして、みんなちよっとばかり仕返しをしようと思っていたから、陰で馬鹿にして笑っていた。でも、あたくしは今日彼を捕まえたから、

思い知らせてやるつもりよ。あたくしは彼に宛てて親展の手紙を書いたの

——生涯の知り合いみたいだね——そして、言っちゃったのよ……。

ジャック・ストロー それで？

パーカー||ジェニングズ夫人 「殿下はこのほかあなたに来ていただくことをお望

みです」って言ってやってやったの。その手紙は今朝召使に持って行かせたわ。

ジャック・ストロー 何てこった！

ホーランド それなら、二人が会わないようにしないと。大公は急に体調が悪くなっ

たって言わなければ。

パーカー||ジェニングズ夫人 半時間前はごく元気だったのをみんな知っているわ。

ウォンリー夫人 それに、フォン・ブレマー伯爵は恐らくどうしても彼に会わせろって言うでしょうね。セバスチャン大公が見つかったと聞いてすごく驚いたに違いないもの。

ジャック・ストロー 諸君、お構いなく。フォン・ブレマー伯爵がわたしに会いにここに来たら、彼からその喜びを奪うのは間違いなく極めて失礼になるでしょう。

ホーランド 君は全く気が狂ってると思う、ジャック。

ジャック・ストロー わたしが大きく間違っていないければ、フォン・ブレマー伯爵は

非常に目が悪いんだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 あの方と面と向かって会うつもりじゃないわ

よね？

ジャック・ストロー ポメラニアには大公が八十一人いるのをお忘れなく。

エセル さっきは七十九人だと言ったわ。

ジャック・ストロー そのあとで新聞を見たら、女大公のアナスタシーヤが双子を生んだばかりで、それで八十一人になるんです。大使がセバスチャン大公を見たことがないというのは、いかにもありそうなことでしょ？

パーカー||ジェニングズ夫人 ポメラニア語で話しかけられるかもしれないっていうのは考えていないみたいね。

ジャック・ストロー 少なくとも七か国語を流暢に話せないボーイに出くわしたことがありませんか？

パーカー||ジェニングズ夫人 あなたが伯爵の汚らしい言葉を話せるって言うこと？  
ジャック・ストロー 汚らしい同国人みたいだね、奥方。でも、その必要はないと言ってもいいでしょう。わたしが伯爵に英語で話しかけたら、ほかの言葉で応えるのは極めて無礼なことになるでしょうから。

パーカー||ジェニングズ夫人 全くもう、あたくしが今までに出くわした生意気な態度の中で、あなたは正に天下一品だわ。

ホーランド でも、いいかい、わたしの記憶では、大公は非常にハンサムな男だって書かれていたぞ。

ジャック・ストロー そうおだてなさんなって、君。わたしたちはまるで瓜二つなんだから。

ウイザーズ夫人が入ってくる。

ウイザーズ夫人 マリア、伯爵があちこちあなたを探しているわ。「ジャック・ストロ

ーを見ながら」あら、失礼しました、閣下。

ジャック・ストロー どういたしまして。

ウイザーズ夫人 伯爵は主人と一緒にやってくるところです。

パーカー||ジェニングズ夫人 「ジャック・ストローに囁く」紳士らしく振る舞うようにしてちょうだい。

エイドリアン・フォン・ブレマー伯爵とウイザーズが入ってくる。

ジャック・ストロー やあ伯爵。

伯爵 これは嬉しい驚きです、閣下。

ジャック・ストロー 女主人をご存じかな？

伯爵 「パーカー||ジェニングズ夫人と握手しながら」初めまして。

ジャック・ストロー 何年も会ってないね。

伯爵 思い出せないくらいです、閣下。

ジャック・ストロー 最後に会った時、わたしには口髭があったと思うが。

伯爵 それで、お顔のご様子が随分お変わりになったんですね。あれ以来、最近はわたしも随分目が悪くなりました。

ジャック・ストロー 多分、あなたはわたしよりも皇帝のその後の消息をご存じなんだろうね。

伯爵 殿下がイギリスにおいでだとお知りになったら、陛下は大層喜ばれることでしょう。失礼ながら、電報を打ったところです。

ジャック・ストロー そうか、やれやれ！

伯爵 そうするのがわたくしの義務でございましたから。

ジャック・ストロー 多分、あなたはわたしに話したいことがあるんだろうね？

伯爵 お話するお時間を二、三分いただきたいと思いますとおりました。

ジャック・ストロー 「パーカー||ジェニングズ夫人に向かって」バラ園をちよつと散歩させていただいてもよろしいかな？

パーカー||ジェニングズ夫人 「苦々しく」大変光栄でございますわ、閣下、殿下にあたくしのバラ園なんかを歩いていただけなんて。

ジャック・ストロー いらつしゃい。「伯爵の腕を取る。ドアのところで伯爵は躊躇する。」いや、頼みますよ。わたしがくつろいでいるここは——長い間に知った中で、最も快適で居心地のいい家なんです。

伯爵 この地に長く滞在されるおつもりですか、閣下？

パーカー||ジェニングズ夫人 大変光栄でございますわ、閣下。「伯爵は出て行く。正に出て行くこうとする時に、ジャック・ストローは振り返ってパーカー||ジェニングズ夫人を惑わすように絶妙なウイנקをする。」この、この、この、この、糞ボーイめ！

第二幕終わり

### 第三幕

前幕と同じ場所。

翌朝。

幕が上がると、パーカー||ジェニングズ夫人とビンセントがすでに舞台に出ている。

ビンセント 親父はどこかな？

パーカー||ジェニングズ夫人 あのボーイと話してるわ。

ビンセント あんな奴、ぶん殴ってやればいいんだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 お父さんならきつとそうするわよ。全く、昨日の夜はどうなることかと思つたわ。夕食に十八人で、その間中あたくしは落ち着けなかつた。

ビンセント 『チェシア・タイムズ』にあの園遊会についての素晴らしい長い記事が載っています。

パーカー||ジェニングズ夫人 あたくしが見てないと思う？

ビンセント 「園遊会は申し分なく執り行われた。誰も滞りなかつたことを否定できない」と書いてあります。

パーカー||ジェニングズ夫人 「感激してちよつと叫ぶ」まあ、嬉しいこと！

パーカー||ジェニングズ夫人が入って来る。

パーカー||ジェニングズ夫人 それで？

パーカー||ジェニングズ 「すまなそうに」あのなあ。

パーカー||ジェニングズ夫人 「憤然として」あなたはまたいつもの馬鹿なまねをやつてきたのね、ジェニングズ。

パーカー||ジェニングズ 「すまなそんな笑いを浮かべて」いつもと同じ馬鹿なまねをやつたみたいだ、マリア。

パーカー||ジェニングズ夫人 冗談じゃないわ、ロバート。そんな冗談はシテイーのお友達にとつておいてちょうだい。

パーカー||ジェニングズ 彼は朝食を食べたところだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 朝食を食べたところだなんて。十一時半だというのに。出て行く気はないのね。

ビンセント いつ出て行くんですか、お父さん？

パーカー||ジェニングズ夫人 いつ出て行くかの問題じゃないわ。お父さんは彼のところへ行って言ったのよ。「何があるうと、十二時までに出て行かないと警察を呼ぶぞ」ってね。そう言ったんでしょ、ロバート？

パーカー||ジェニングズ それが、お前……。



パーカー||ジェニングズ夫人 あなたはいつも馬鹿だった、ジェニングズ。今度は何をやったの？

パーカー||ジェニングズ それが、お前、部屋に召使が一人必要だって言うんだ。朝食の席に召使を一人も置かない我々イギリスの習慣は好まないと言ってるね。

パーカー||ジェニングズ夫人 うちの召使を使わせたって言うんじゃないわよね？

パーカー||ジェニングズ お前、わしに何ができたって言うんだ？ その時、部屋に

は召使が一人いたんだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 それで、彼が朝食を食べる間、あなたはおとなしくしてたの？

パーカー||ジェニングズ 彼は食欲旺盛でね、マリア。

パーカー||ジェニングズ夫人 あたくしに話しかけないで。あなたには彼に遠慮なく

言うチャンスがあつたはずよ。

パーカー||ジェニングズ それが、お前、ちよつとの間二人だけになったもんで。

パーカー||ジェニングズ夫人 それで？

パーカー||ジェニングズ 「力なく」彼が気がおけないものだから……。

パーカー||ジェニングズ夫人 気がおけないですって！ もう、あなたはどうしようもない馬鹿よ。あたくしが彼と話しをするまで待つてなさい。

パーカー||ジェニングズ それなら、お前、どうして昨日の夜追い出さなかつたんだ？

パーカー||ジェニングズ夫人 どうして昨日の夜追い出せたっていうの？ 十八人の

人間を彼に合わせるために夕食に來させといて。

ビンセント ウォンリー夫人はどうするの？

パーカー||ジェニングズ夫人 もう、あの人の顔は二度と見たくないわ。あの人が黒

幕だつたのは分かつてるんだから。

ビンセント でも、お母さんがあの人と呼んだんだと思つてたけど。

パーカー||ジェニングズ夫人 その通りよ。それにホーランドもね。あの二人があたくしたちを混乱に陥れたんだから、あの二人があたくしたちを救い出さなかつたのを救い出さなかつたのよ。今や状況は、あの二人にとつてもあたくしたちと全く同じくらいよくないわ。それがせめてもの救いよ。

ジャック・ストローが、非常に涼しくて過ごしやすそうなフランネルの服を着て入つて来る。

ジャック・ストロー やあ、ここにいたんだ！ タバコをくれる人を探し回つていたところなんです。

パーカー||ジェニングズ夫人 「皮肉っぽく」朝食がお気に召したのならよろしいのですが。

ジャック・ストロー ああ、ありがとう。タバコをいただけるかな、君？

ビンセントがタバコを勧めると、ジャック・ストローはビンセントの手からケースを取り、勝手に一本取ってからケースを返す。

ビンセント わたしも吸ってはいけませんか？

ジャック・ストロー 構いませんよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 「攻撃的な態度で」それで？

ジャック・ストロー あなたが昨日催したパーティーは素晴らしかった、ジェニングズ夫人。大成功でしたよね？「パーカー||ジェニングズの方を振り向いて」ところで、昨日の夜飲んだワインは何だったんですか？

パーカー||ジェニングズ夫人 駄目、よしなさい、あなた。ジェニングズは騙せるかもしれないけど、あたくしを騙すのは駄目よ。

ジャック・ストロー 「騙す」？ 「騙す」ですか？ 英語の知識はあるつもりだが、その言葉にはお目にかかったことがないと思うな。

パーカー||ジェニングズ夫人 そうなの？ ひよっとすると、あなたは「薄粥」(刑務所で出される)という言葉にもお目にかかったことがないわね？ でも、それが何なのか調べるまでもなく、知りたいと思う前に知ることになるわ。ジャック・ストロー 謎めいたことをおっしゃいますね、奥方。わたしは常々、そういうのは疲れる習慣だと思っています。

パーカー||ジェニングズ夫人 それなら、はっきり言いますわ。怖がらないでね。

ジャック・ストロー 「ゆったりと腰を下ろしながら」どうしたって、田舎屋敷での朝食と昼食の間は、一日の内が一番気持ちのいい一時だと思うね。

パーカー||ジェニングズ夫人 辺りに人がいないか見てちょうだい、ビンセント。

ビンセント 大丈夫です、お母さん。

ジャック・ストロー 「平然とビンセントを見ながら」ロマンチックな劇の陰謀者の雰囲気すべて備えているね、君は。つけ髭と黒メガネがあれば、イメー  
ジは完璧だ。

パーカー||ジェニングズ夫人 それじゃ、お聞きなさい、あなた。

ジャック・ストロー 喜ばせてくれますね、奥方。

パーカー||ジェニングズ夫人 あたくしたち、夫とあたくしが話し合ったことだし、あなたが何と思おうと、あたくしたちは馬鹿じゃないわ。あなたを警察に引き渡すのが全く当然なのよ。

ジャック・ストロー ちょっと待った。今、あなたはどっちの人物に話しかけているんですか？ セバスチャン大公ですか？ それとも、グラランド・バビロン・ホテルから来たボーイですか？

パーカー||ジェニングズ夫人 まあ、気をつけないと、ひっぱたくわよ。

ジャック・ストロー あなたが王室の人間にそんなことをしないのは確かですよ。今はジャック・ストローに関心があるに違いない。

パーカー||ジェニングズ夫人 驚くかもしれないけど、この半時間関心があつたわ。ジャック・ストロー あなたの態度がいささかぶつきらぼうだと思つてました。

パーカー||ジェニングズ夫人 あたくしは、あなたを警察に引き渡すのが全く当然だと言っていたわ。

ジャック・ストロー その問題には二つの意見があるかもしれませんが、それはよしとしましょう。

パーカー||ジェニングズ夫人 でも、あたくしたちはスキヤンダルは望んでないのよ。ジャック・ストロー 上流社会ではそういう注意深さが必要ですよね。

パーカー||ジェニングズ夫人 だから、あたくしたちは喜んであなたを行かせてあげらわ。荷物をまとめて、車で駅まで行くのよ。

ビンセント お母さん、我々全員で見送らないと、随分変だと思われますよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 そうね、みんなで見送りましょう。とにかく、無事にこの人を追っ払わなければ。一時間後に列車があるから。一つだけ忠告するわ。それは、「チャンスはある間に生かせ」ってことね。

ジャック・ストロー ご親切はありがたいんですが、わたしはここが非常に快適なんです。

パーカー||ジェニングズ夫人 笑わせないでちょうだい。

ジャック・ストロー わたしが常々やっかいだと思っているのは、面白いことを言おうとする時にそうするのは難しいけれども、真面目なことを言おうとする時にそうするのは実に簡単だということです。

パーカー||ジェニングズ夫人 お望みじゃないでしょうけど、あたくしが召使に言いつけて、あなたの襟首を捕まえて……。

ジャック・ストロー ねえ奥方、ちゃんと落ち着きましょうよ。かっとするなんて、我々どちらにも似つかわしくありませんからね。

パーカー||ジェニングズ夫人 行かないって言うつもりなの？

ジャック・ストロー あなたの言い方は随分ひどい。むしろ、こう言いましうよ。「あなたはもてなしのいいわたしの家から離れられないって言うつもりなの」って。

パーカー||ジェニングズ夫人 まあ、それで、どれだけの間、あなたとお付き合いまする光栄をあたくしたちに与えてくださるつもりなの？

ジャック・ストロー いや、実を言うと、まだはつきり決めた訳ではありません。この進展を待つつもりです。

パーカー||ジェニングズ夫人 警察を呼んでちょうだい、ロバート。我慢できないわ。ビンセント ねえ、お母さん……。

パーカー||ジェニングズ夫人 お黙りなさい、ビンセント……。「ジャック・ストローに向かつて」ああ、あなた、お気の毒ね。六か月間、罪人がやるまいはだ（古麻などをより合わせてタールなどを染み込ませたもので、甲板のコーキングや管のパッキンなどに用いる）作りを続けたあとなら、今のあなたの素敵な白い手はかわいらしく見えるでしょうね。

ジャック・ストロー イギリスではそれは廃止されたんだと思っていましたが。

パーカー||ジェニングズ夫人 あら、そんなことはない、廃止されてはいないと思うわ。

ジャック・ストロー ああ、多分、わたしが考えていたのは踏み車のことだったんでしよう。

パーカー||ジェニングズ夫人 さあ、ビンセント、ぬいぐるみのフクロウみたいに、いつまでそこに突っ立っているつもりなの？

ジャック・ストロー 見間違えたのだろうか、それともあれはわたしが見た地方紙なのだろうか？「地方紙を取り上げる。」ああ、あなたの園遊会の記事が載っていたかと思う。おやまあ、コラムが二つもある！ あなたは、あんなにたくさん人を呼ばなければよかつたと思っているに違いない。「読みながら」「セント・アース公爵夫人、ミアズトン侯爵夫人、ミアズトン侯爵、ホリントン卿夫妻、パーナビー子爵」——いやはや、何と抜け目のないことか——「ウォンリー夫人、ランバール夫妻、シェフィールドの主教、スプラッテ閣下夫人」……。ねえ、あなたより身分の低い友達は妬んで歯ぎしりするんじゃないですか？ でも、わたしのことに触れてませんか？ ありました。「読みながら」「セバスチャン大公はあらゆる点で王子らしくかつた」。わたしが言った通りだ。「黙読しながら」ああ、そんなにおだてないで。「声を出して読みながら」「殿下は、物腰の優美さと王室にふさわしい人柄ですべての人を魅了した」。血は争えないものだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 「パーカー||ジェニングズに向かつて」あなたはそこに突っ立ったままこの人にあたくしを侮辱させておくつもりなの、ロバート？

ジャック・ストロー 「平然と」この高貴で高名な人たちがこの地方紙の次の号を読んだ時、みんなどう思うと思いますか——わたしは崇拜される人物らしく本分を尽くしましたよね——大層喜んで握手した相手である王室の人間が、二週間前はグラランド・バビロン・ホテルでコーヒーとリキュールを出していたなんて？

パーカー||ジェニングズ夫人 もう、お黙りなさい、あなたは……。

ジャック・ストロー あなたが医者と教区牧師と事務弁護士をパーティーに呼ばなかったことで、村人の中でそつと忍び笑いが起きているのがわたしには聞こえます。そして、その噂がチェシア中に広がりながら、その忍び笑いが大きくなってさざめいているのが聞こえます。それが地方からまた地方へと伝わりながら、とめどなく大笑いしているのが聞こえます。マンチェスターとリバプールと北部の町々では大きな高笑いになっていて、わたしはすでにブリストルとポーツマスと西部の大笑いを聞いています。そして、それがロンドンに届いたら——ロンドンでは物事がどうなるかご存じでしょうが、ロンドンには非常に大きいから、実際何かを手に入れるのに少ししか時間がかかりません。でも、いよいよそうなった時、あの巨大な街が笑いで痛い脇腹をかかえてうめくのが分かりませんか。でも、この冗談が分からない人を教えてあげましょう——「新聞を取り上げて読みながら」——ああ、彼らは得意で笑っていたのが急にしよげることになるでしょう。「セ

ント・アース公爵夫人、ミアズトン侯爵夫人、そしてホリントン夫人とパーナビー卿、それにシェフィールドの大主教とスプラッテ閣下夫人」。

パーカー||ジェニングズ夫人　まあ、この人でなし！

ジャック・ストロー　わたしには、あなたが風に震える三枚の葉っぱのように笑い声に押されて飛ぶのが見えます。その笑い声はパリやリビエラまであなたにつきまとうでしょう。パリでは並木道でみんながあなたのことをちよつとした歌にするでしょうし、リビエラではみんながあなたの写真を絵葉書にして売るでしょう。わたしには、あなたが広大なアメリカに顔を隠すために大西洋を渡って逃げるのが見えます。そして、そこでは熱狂で黄緑色になったゴシップ新聞が、侮辱的なコラムに嘲笑的なコラムを重ねるでしょう。ああ、ねえ奥方、そこまで世間を楽しませるために、六か月の重労働に耐える価値があるなんて思いませんよね？

沈黙がある。パーカー||ジェニングズはハンカチを取り出し、丸めて額を拭う。ビンセントはそれに気づいて、同じことをする。パーカー||ジェニングズ夫人は二人に目をやって、二人がやっていることを見ると、ハンカチを取り出して巻き、ゆつくりと額を拭う。

パーカー||ジェニングズ　無駄だよ、マリア。彼を警察に引き渡すことはできない。

パーカー||ジェニングズ夫人　ほかに言うことはないの。あたくしたちはこの人の思いのままだし、この人にはそれが分かっているんだわ。

ジャック・ストロー　「愛想よく微笑んで」わたしが見たところ、あなた方なら状況がお分かりになるだろうと思っていました。

パーカー||ジェニングズ夫人　「打ち負かされて」あなたはどうするつもりなの？

ジャック・ストロー　今は、お許しただければ、ちよつとブランデーのソーダ割りを飲むつもりです。呼び鈴を鳴らしてくれたまえ、ビンセント。

ビンセント　いいんですか、ママ？

パーカー||ジェニングズ夫人　「やけくそになって」もう、いいわよ、呼び鈴を鳴らしなさい。

ジャック・ストロー　あなた自身のためを思って、使用人の前では最大の礼儀正しさを振る舞うことをご忠告しますよ。

召使が登場する。

パーカー||ジェニングズ　殿下にブランデーのソーダ割りをお持ちしろ、ジェイムズ。  
召使　かしこまりました、旦那様。

出て行く。

パーカー||ジェニングズ夫人　ああ、ブランデーで窒息すればいいのに。

ジャック・ストロー そんな望みを持つことはできないでしょうね。

パーカー||ジェニングズ夫人 さあ、いいこと、あたくしは馬鹿じゃない、あなた―  
―何と呼んだったらいいのかわからないけど……。

ジャック・ストロー いつも呼んでいたように呼んだ方が都合がいいってことが分かりますよ。

ビンセント 生意気な！ 我慢して、糞ボーイに「閣下」と言ってるんだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 あたくしたちが一番望んでいないのはスキヤンダルだ  
って、あなたも分かっているから、あたくしたちをパンを焼くみたいに意のままにしてこれたのよ。

ジャック・ストロー 両側が十分キツネ色になるようにね。

パーカー||ジェニングズ夫人 すぐにおとなしく出て行ってくれたら、二百ポンドあげるわ。ほら！

ジャック・ストロー おお、これは驚いた。わたしを追い出すために、喜んで二百ポンドくれる人がいるとはねえ！ わたしは田舎屋敷では結構いい客だといつも自負してきたのに。

ビンセント 使用人の部屋にはおかしな趣味があるんでしょう、多分。

ジャック・ストロー 君は全く賢いことを言う癖があるよね。

パーカー||ジェニングズ夫人 それで？

ジャック・ストロー 奥方、わたしが登場することでああなたの身にふりかかる不幸の  
痕跡を根絶するまで、わたしはどんな誘いがあってもここを離れませんよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 あなたが言おうとしているのは……。

パーカー||ジェニングズ 「遮って」気をつける、お母さん。ジェイムズが来るぞ。

召使がブランデーとソーダとグラスを持って入って来る。

ジャック・ストロー いい奴だ、ビンセント、混ぜてくれないか？

ビンセント かしこまりました、閣下。

ジャック・ストロー このブランデーはどこで手に入れるんですか、ジェニングズさん？

これは大好きです。

パーカー||ジェニングズ そう言っていたいただいてありがとうございます、殿下。

召使は出て行く。

パーカー||ジェニングズ夫人 もう、耐えられないわ。

来訪者を告げるために召使が入って来る。

召使 ウォンリー夫人とホーランド様がお見えになりました。

二人が入って来る。召使は出て行く。

パーカー||ジェニングズ夫人 やつと来たのね！ 困っているの。

ビンセント お母さん、お願いだから、品のないまねはしないで。

パーカー||ジェニングズ夫人 あら、もう気取ってなんかいられないわ。あたくしが品がないとしたら、そうせざるを得ないからよ。

ホーランド でも、何が問題なんですか？

パーカー||ジェニングズ夫人 困ったことに、この人が問題なの。出て行こうとしないのよ。

ウオンリー夫人 何ですって！

ジャック・ストロー あのね、あなた方がわたしのことをそんなふうに話し合うのを聞くのは、実に不愉快ですよ。わたしに出て行って欲しいんじゃないんですか？

パーカー||ジェニングズ 我々は彼を警察に引き渡すぞと脅したんだが。

ホーランド それで？

パーカー||ジェニングズ 彼は我々を嘲笑うだけで……。

ビンセント 金を差し出して品位を落とすことまでしたのに。

ホーランド もちろん、彼はあなた方の金は望んでいません。

パーカー||ジェニングズ夫人 それなら、あなたが彼が望んでいるものを提案した方がいいんじゃないの？

ホーランド いいかい、ジャック、君は我々全員を笑い者にしてしまったんだ。気持ちよく出て行く気はないのか？ 我々は本当にすごく困っているんだ。

ジャック・ストロー わたしはいつも良心に訴えられると心が動くが、今回は私たちの願いに対して心を鬼にするつもりだ。

ホーランド こいつめ！

ジャック・ストロー 怒りなさんな。あなたが馬鹿なことしか言おうとしないから、しつぺ返しをしようとしているんだ。

ホーランド やるべきことは一つしかない。それは力づくで君を追い出すことだ。

ジャック・ストロー そんなことは、妙なことを言うようだが、すでに提案されているんだ。でも、そういうやり方が不都合なことはジェニングズ夫人に説明してあるよ。

召使が入って来る。

召使 ウィザーズ夫人が車の中にいらっしやいまして、奥様、ちよっとお目にか

かれないか、お知りになりましたがってらっしやいます。

パーカー||ジェニングズ夫人 もう、誰とも会えないわ。

ジャック・ストロー わたしのことがあるからといって、断っていただきたくないです。すね、ジェニングズ夫人。

パーカー||ジェニングズ夫人 「召使の前なので、愛想よく」ええ、はい、閣下。

ジャック・ストロー 彼女が来るのが迷惑なのかと思ひまして。彼女はとても素敵な女性だと思ひました。もう一度お目にかかりたいものです。

パーカー||ジェニングズ夫人 あら、もちろん、殿下がお望みなら……。

ジャック・ストロー どうもありがとうございます。

パーカー||ジェニングズ夫人 ご案内してちょうだい、ジェイムズ。

召使 かしこまりました、奥様。

召使は出て行く。

パーカー||ジェニングズ夫人 あたくしの家はもうあたくしのものじゃないわ。会いたくない人とも全部会わなければならぬ。我慢ならぬ人がいるとすれば、それはファニー・ウィザーズだわ。昨日あの人を呼んだのは、嫉妬してくやしがるだろうと思つたからだけなの。あの人を呼んでみれば俗物だわ。こんな時間に来るなんて、何が望みか知らないけど。「ジャック・ストローに向かつて」ペテン師！ ペテン師！

ジャック・ストロー ねえ、驚いたね、あなた方はみんな実に恩知らずだ。わたしはあなた方のパーティーに地方紙のコラムに後世まで残る名声を提供する華やかさを添えたのに。わたしはセント・アース公爵夫人と親しくおしゃべりし、シェフィールドの大主教には最上級の人たちのご乱行について痛ましい話をさせておいて、伯爵とは、名前は何と言つたか……。

パーカー||ジェニングズ夫人 エイドリアン・フォン・ブレマーよ——あなたなら、自分の国の大使の名前を思い出すのに骨が折れるかもしれないでしょうね。

ジャック・ストロー で、フォン・ブレマー伯爵が現れて、あなた方がみんな途方に暮れていた時、わたしがすべてをうまくやつたんだ。生まれつき謙虚なわたしとしては、そのやり方が素晴らしかったとは言わぬがね。

パーカー||ジェニングズ夫人 伯爵がどうしてあなたの正体を見破れなかったのか、分からないの。伯爵がいた間ずっと、あたくしは居ても立つてもいられたわ。

召使が入つて来る。ウィザーズ夫人が続いて入つて来る。

召使 ホートン・ウィザーズ夫人です。

出て行く。

ウィザーズ夫人 ああ、あなた、ちよつと寄つて言ひたかただけなの。昨日は万事が何て素敵に運んだんでしよう。

パーカー||ジェニングズ夫人 うちのパーティーを認めてくださつて嬉しいわ。

ジャック・ストロー こんにちは、ウィザーズ夫人。



ウィザーズ夫人 殿下がわたくしを覚えてくださって、ありがとうございます。

ジャック・ストロー わたしの仕事の特殊性ですね。

ウィザーズ夫人 もっとご近所の人たちに拝謁の榮譽を与えてくださいませんか、閣下？

ジャック・ストロー ジェニングズ夫人が引き留めるなら、すぐに行くつもりはありませんが。

パーカー||ジェニングズ夫人 この家はあなた様次第ですわ、閣下、榮譽を与えるとお決める限りは。

ジャック・ストロー ジェニングズ夫人は最も優しい女主人です。庭を一回りしたら素敵だと思いませんか、ジェニングズ夫人？ ウォンリー夫人はあなたのバラを見せてもらいたいのに違いありません。

ウォンリー夫人 ジェニングズ夫人はご親切にも昨日見せてくださいましたわ。

ジャック・ストロー 「美しきものは永遠の喜び」だと確かな筋から聞いています。

ジェニングズさんが今日もまたお見せするでしょうね。

パーカー||ジェニングズ 殿下のお望みを叶えらるるとは、とても幸せで誇らしく思います。

ウォンリー夫人とパーカー||ジェニングズを出て行かせるために、ジャック・ストローは戸口に立つ。

ジャック・ストロー 「ビンセントに向かって」君は行かないのかね？  
ビンセント もちろん行きますとも、閣下。

ウィザーズ夫人とビンセントは出て行く。

ジャック・ストロー わたしも一分で行きますから。ところで、お嬢さんはどこですか？

パーカー||ジェニングズ夫人 セルロ卿と散歩に行ったわ。

ジャック・ストロー お目にかかれたらとても嬉しいと、お嬢さんが戻った時に言っていただけとありがたいのだが。

パーカー||ジェニングズ夫人 どういうことかしら？

ジャック・ストロー どういうことかは、お嬢さんとわたしが会ったあとで、間違いなくお嬢さんからお話できますよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 そんなことをするつもりはないわ。

ジャック・ストロー お願いしたことをやっていただけとありがたいのだが、ジェニングズ夫人。

出て行く。

パーカー||ジェニングズ夫人 ほら、あの人が実際にあたくしをこき使うのを今見たでしょ。あの人を追い出せないんじゃないかっていう気がしてきたわ。あの人は永久にここに居続ける気がする。あの人がこの屋根の下で年を重ねながら、うちの食べ物を食べ、うちのワインを飲んで、ジェニングズに払わせる仕立屋のつけを書き出すのが見えるわ。

ホーランド お気の毒に。そうなること請け合いですね。

パーカー||ジェニングズ夫人 気の毒だなんて言ってもらって何になるっていうの？ あなたにできることは、あの人を追い出すのを手伝ってくれることしかないじゃないの。エセルがセルロと一緒にやるチャンスは台無しにしたんだから。セルロはもうエセルを見ようとしなない。

ホーランド だとしても、多分、そんなのは大した問題じゃないでしょう。

パーカー||ジェニングズ夫人 あの人が大公だと思っていた時に、エセルが関係を持つとうとしなかったのだけが救いだわ。

ホーランド いいですか、わたしがあなただったら、エセルをあの男に会わせるでしょうね。あの男はエセルとの話が済めば、喜んで出て行くだろうと思いませんよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 それはどうということなの？

エセルとセルロ卿が入って来る。

パーカー||ジェニングズ夫人 エセルがあなたを散歩に連れ出していたんですか、ね

えセルロ卿。

セルロ ええ、ちよっと散歩していたんですよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 エセルがあなたを疲れさせてなかったらよろしいんだけど。エセルはすごく散歩好きですよ、あなた。

セルロ わたしの考えでは、散歩に行くというのは門の中にあることなんですよ。

パーカー||ジェニングズ夫人 とてもいい考えなこと。それが正にあたくしも望むところですよ。

セルロ 「冷ややかに」今日は風が変わってませんか？

パーカー||ジェニングズ夫人 「何食わぬ顔で」そうかしら？ 気がつきませんか？  
たわ。

パーカー||ジェニングズ夫人が半狂乱になって入って来る。

パーカー||ジェニングズ夫人 マリア、あの男が品評会に出すうちの見事なバラを全部切つて、フアニー・ウイザーズにやっているんだ。

パーカー||ジェニングズ夫人 まあ！

パーカー||ジェニングズ夫人があわてて行こうとするちょうどその時に、ジャック・ストローが一握りの見事なバラを持って現れる。

ジャック・ストロー やあ、バスケットはありませんかね。

パーカー||ジェニングズ夫人 この——この——この大馬鹿者！

ジャック・ストロー はて、わたしが何をしたって言うんですか？

パーカー||ジェニングズ夫人 それは来週クリスタル・パレスに出品するつもりなのよ。

ジャック・ストロー すごく素敵だと思ったんです。だから、ウイザーズ夫人も好きかもしれないと思ったもので。

パーカー||ジェニングズ夫人 「ジャック・ストローからバラをひったくりながら」

まあ！

パーカー||ジェニングズ夫人は飛び出して行く。パーカー||ジェニングズも続いて出て行く。

ジャック・ストロー 「平然として部屋の中に入って来ながら」わたしがやったことは正しくなかったみたいだ。

セルロ 今度ばかりは正にへまをやったんだ、君。

ジャック・ストロー あの礼儀作法の本が手元にあればいいんだが。見事なバラについて書いてあったかどうか。「エセルに向かつて」まだあなたにおはようを言う光栄に浴していませんでした。

セルロ ねえ、君、不快に思われたくないが、ジェニングズさんとわたしが散歩に行った時、わたしたちが戻る頃には、君はずらかっているだろうというふうに考えていたんだがね。

ジャック・ストロー ねえホーランド、ウイザーズ夫人に、「親愛なるジェニングズ夫人がバラをバスケットに入れてるのはあなたのためだ」って言うのを頼まれてくれないかな。

ホーランド 「自分の意志に反して笑いながら」君に怒っても何にもならないね、ジャック。ぜひとも行くよ。

出て行く。

ジャック・ストロー そうするのが機転の利く人間というものだ。わたしがサルタンだったら、彼を大宰相にするね。

ジャック・ストローは考え深げに、しかしいかにもあからさまにセルロを見る。

セルロ 何だってわたしを見つめているのかね？

ジャック・ストロー 彼を手本にするのが好都合なことを、どのようにすればふさわしい心遣いでもってあなたに示すことができるかなと思案しているところなんだ。

エセル セルロ卿にはここにおいていただく方がずっといいと思いますわ。

ジャック・ストロー あなたと話し合わなきゃならないささか重要な問題があるんです。

エセル あなたが言うことで、セルロ卿に聞かれてはいけないことはないはずですよ。

ジャック・ストロー よろしい、いつもの慎み深さを克服するように努力しましょう。

セルロ そんな慎み深さがどこにあるのか分からんね。君はわたしが今までに出くわした中で一番ずうずうしい奴だ。

ジャック・ストロー 実を言うと、この四年間、それがわたしの唯一の生活の手段だったんだ。

エセル わたしに何を言いたいの？

ジャック・ストロー 少しばかりわたしを勇気づけるために、ちよつと微笑んでいただけませんか？

エセル わたしが言わないでおこうと思っていることを言わせる気なのね。あなたがそんなふう憎らしくてひどい人だなんて、シヨックだわ。あなたが馬鹿なはずらに加担するのは恥ずべきことだと思います。

ジャック・ストロー ねえセルロ、君は——出て行ってくれないか。

エセル わたしはここにおいて欲しいの。

ジャック・ストロー 彼が実に具合悪く感じるようになるよ。彼も目一杯機転が利くから——大宰相にしよう——全く余計なお世話だと思うだろうが。

セルロ そこまでわたしの気持ちを気にする必要はないよ。

ジャック・ストロー 「エセルに向かって」わたしが弁解するのを聞いていただけませんか？ わたしが例のいたずらを全然気にしていないと思いませんか？ わたしがここに来たのは、あなたに会える唯一のチャンスだったからなんです。

エセル あなたがやったことのせいで、わたしはぞつとしてうんざりしてるの。

ジャック・ストロー わたしが苦しいほどあなたに恋したのが、最初の瞬間から分かりませんでしたか？

セルロ おいおい、これは実際いかにも具合が悪い。

ジャック・ストロー あなたの気持ちは気にしなくていいと言ったじゃないですか。

エセル 「笑いをこらえきれずに」ねえ、あなたはおかしすぎるわ。あなたを怒らなきゃいけないのに、できないわ。

ジャック・ストロー 昨日わたしにおっしゃったことを覚えていますか？

エセル いいえ。

ジャック・ストロー それなら、思い出させてあげましょう。あなたはわたしに出て行ってくれと言いました——わたしが王室の人間だからというので。わたしがただのボーイでも、まだ出て行って欲しいですか？

エセル あなたがずっとわたしのことを嘲笑っているのを分かっててもよさそうだったのに。

ジャック・ストロー いいですか、もしわたしが王室の人間で、あなたの側にいるためにボーイに身をやつしていたとしたら、あなたはともロマンチックに思ったことでしょうか。同じ理由で王室の人間のふりをするのがボーイだったら、どうしてシヨックなんですか？

エセル その違いが分からないのなら、話しても無駄ね。

ジャック・ストロー わたしと結婚してくれませんか、エセル？

セルロ 全く、よっぽど君をこの家から蹴り出してやろうかと思うよ。

ジャック・ストロー そうですか？ となると、わたしは自分がポメラニアではアマチュア・ボクシングのチャンピオンだということを喜ぶしかないね。

セルロ となると、事は少しばかり面倒になるよね。

ジャック・ストロー 確かに、こんな厄介な状況で結婚の申し込みをしたことはないがね。「エセルに向かって」さあ、あなた、筋の通らないことは言わないで。実際、昨日はわたしが大公だからという理由で拒否しました。今日はわたしが特別な人間じゃないからという理由で拒否するつもりじゃありませんよね？

エセル 「冷ややかに」わたしが受け入れなければならない理由を教えてくださいませんか？

ジャック・ストロー では、あなたは見逃したかもしれませんが、わたしがあなたに恋しているのと全く同じだけあなたもわたしに恋しているという至極もつともな理由があります。

エセル わたしですって？

ジャック・ストロー 正直なところ、否定できますか？ でも、たとえそうしても、失礼ながら、わたしはあなたを信じません。

エセル あなたを納得させるのはとても簡単だわ。セルロ卿、あなたが昨日わたしに言ってくださったのは……。

エセルはためらいのために少し声を震わせて言いよどむ。

セルロ ええっ、あのことを言うんですか？

エセル 「微笑みながら」あなたが望みのことを言うのよ。

セルロ 「低くお辞儀をして」ストロー君、君にわたしとエセル・パーカーⅡジュエリングズさんとの婚約をお知らせさせていたきたい。

ジャック・ストロー まだ信じられない。あなたは救いがたいほどロマンスを求めているんじゃないですか、ねえ、お母さんが大層不快に思うのは確かだと思いますよ。

エセル まあ、あなたには腹が立つわ。あなたを本当に怒らせることができたらいのに。

ホーランドが駆け込んで来る。

ホーランド　おい、ジャック、気をつけるんだ。  
ジャック・ストロー　どうしたんですか？

えらく動揺したパーカー||ジェニングズ夫人とパーカー||ジェニングズが入って来る。

パーカー||ジェニングズ夫人　ゲームは終わりよ。もう何をやっても遅すぎるわ。

ホーランド　フォン・ブレマーがまた来たんだ。

パーカー||ジェニングズ　車に誰かを乗せているんだが、私服の警官じゃないかと思うんだ。

パーカー||ジェニングズ夫人　どうすればいいの？　お願いだから、そこに突っ立つたままにやにや笑わないで。

エセル　「とっさに」捕まるんじゃないの？

ホーランド　そら、まだ逃げる間があるよ。

ビンセントが入って来る。

パーカー||ジェニングズ夫人　どうなってるの？

ビンセント　ウオンリー夫人が彼と話してる。彼女はできるだけ引き留めようとしているんだ。

パーカー||ジェニングズ夫人　彼女に祝福を！　すべて許しますから。

エセル　そうだわ、チャンスがある間にどうか行つてちょうだい。あなたが捕まるのを見るのは耐えられないわ。

ジャック・ストロー　どうして構うんですか？

パーカー||ジェニングズ夫人　さあ、いいこと。あなたはあたくしにひどいいたずらをしたけど、悪魔みたいにずうずうしかった。あなたに処罰されて欲しくないわ。あなたに何があるのか分からないけど、好きにならずにはいられないのよ。

ジャック・ストロー　奥方、わたしがあなたの足に体当たりするのを防げるのは、支配者のしつこい存在しかありません。

パーカー||ジェニングズ夫人　まあ、馬鹿なこと言わないの。あなたが逃げるのを助けたいのよ。

ジャック・ストロー　「ドラマチックな身振り」奥方、我が母の一人息子は決して敵の前から逃げたことはありません。わたしは留まって、甘んじて報いを受けるつもりです。

パーカー||ジェニングズ夫人　あたくしは今、自分のためを思っているんじゃないのよ。スキヤンダルになっても、あたくしは金持ちだから、連中に忘れさせることができるわ。

セルロ　ねえ、君、ずらかった方がいいよ。今やもうイギリスには君のいる場所はないんだ。

エセル　「小声で」少しでもわたしのことが好きなら、こんな恐ろしい危険を冒さないで。

ジャック・ストロー　無理にでも留まれと言ってくれさえすれば、その意見の一致はすごく嬉しいことになるのだが。

パーカー||ジェニングズ夫人　この人は気が狂ってる。『不思議の国のアリス』に出てくる「三月ウサギ」と同じだよ。精神病院に閉じ込めなきゃいけないのよ。

ジャック・ストロー　ナポレオンがわたしの先祖だったかどうか忘れましたが、今はちやうど彼のような気持ちです。「てこでも動かんぞ」ですね。

セルロ　本当を言うと、それを言ったのはマクマオン（一八七三〜七九年にフランスの大統領だった軍人・政治家）だよ。

ジャック・ストロー　「貴族らしい仰々しきで」ナポレオンだと思いたいものだね。パーカー||ジェニングズ　彼らがぶらぶらとやって来るところだ。

パーカー||ジェニングズ夫人　それじゃ、もう手遅れよ。何もかもフローリー・ウィザーズの前にはさらけ出すことになってしまったわ。

ビンセント　「窓越しに」ほら、ウォンリー夫人が彼にバラを見させているところだ。ホーランド　彼女はいい人だ。できるだけ時間を稼いでいるんだ。

ジャック・ストロー　ところで、バラの話だが、わたしがウィザーズ夫人のために切った束はもうバスケットに入れましたか？

パーカー||ジェニングズ夫人　もう、あなたの首をつかんで絞め殺してやりたいわ。パーカー||ジェニングズ　気をつける。

全員がこれからどうなるか考えて息もつけない状態で一瞬沈黙する。ウォンリー夫人がウィザーズ夫人と一緒に入って来る。ウィザーズ夫人はジャック・ストローを見て息をのむ。

ウォンリー夫人　あら、もう行ったんだと思ってたわ。

ウォンリー夫人に続いて、すぐにエイドリアン・フォン・ブレマーが入って来る。ジャック・ストローは実に愛想よくエイドリアン・フォン・ブレマーのところに寄って行く。

ジャック・ストロー　やあ、君、朝ずっと君が来るのを待っていたんだ。

全員が驚く。場面が進むと、全員に驚きと当惑が増していく。

フォン・ブレマー　朝より前には来られませんでした。わたしの電報に対する返事をたった今受け取ったばかりでして。

ジャック・ストロー　わたしにいい知らせがあるのかね？

フォン・ブレマー 最高のお知らせです。皇帝があなた様の希望をすべて承諾されました。

ジャック・ストロー それはそれは。

フォン・ブレマー 皇帝陛下はまたあなた様に会いたくてたまらないんです。陛下は郵便が届くたびにあなた様からの手紙が来るのではないかと思っておられます。「エセルの方に近寄って行く。」お嬢様、わたしはやんごとなきご主人様からあなた様に衷心からのご挨拶を申し上げるよう命ぜられております。

エセル わたしにですって？

パーカー||ジェニングズ夫人 訳が分からないわ。

ジャック・ストロー それなら、わたしが正式に愛の告白をするよりほかに方法がありませんまい。ジェニングズ夫人、わたしは祖父からあなたにお嬢さんとの結婚の許しを乞う許可をもらいました。

パーカー||ジェニングズ夫人 でも、この男はペテン師よ。あたくし同様、セバスチヤン大公じゃないわ。

ウィザーズ夫人 どういうことですか？

パーカー||ジェニングズ夫人 あら、それは、お望みなら、教えてあげるわ。あなたがあそこにいた時にすべてが始まったのよ。思えばあの朝、あたくしは寝起きが悪かったみたいだわ。それで、グランド・バビロン・ホテルで牧師の奥さんのなんとか夫人があたくしのところへ寄って来た時に、あたくしはその人を冷たくあしらったの。それ以来、あたくしはとても申し訳なく思っていたんだけど、それで罰を受けていたのよ。みんな、あたくしが昔から俗物なのを知ってて——あなたみたいだね、フローリー——あたくしに仕返しをしようと思ったのよ。ホテルのボーイから一人選んで紳士らしく正装させて、セバスチヤン大公だと言って紹介したの。

ウィザーズ夫人 「ジャック・ストローを指差しながら」あの人ですか？

パーカー||ジェニングズ夫人 そうよ、あいつよ！ あいつはボーイなの、それが正体よ。そして、この一週間、あいつのお陰であたくしは全く馬鹿なまねをやったの。

フォン・ブレマー 「すっかり戸惑って」でも——分かりませんね。わたしはセバスチヤン大公をお生まれになった時から存じておりますが。

ホーランド あなたは間違っておられる。この人とわたしはアメリカで一緒でした。

二年間、一緒に生活しました。本当の名前は知りませんが、ジャック・ストローという名前です。

フォン・ブレマー でも、あなたのおっしゃることは信じがたい。わたしはこの方を自分の息子と同じくらい知っています。

パーカー||ジェニングズ夫人 この人が本当に大公だとおっしゃるんですか？

フォン・ブレマー もちろん、そうです。不思議なのは、わたしどもがこの四年間この方を見つげようと世界中を探している時に、どのようにしてここに來られたかだけです。



ホーランド　でも、君は合衆国でわたしと一緒にだったジャック・ストローだろ？  
ジャック・ストロー　そうです。

ウオンリー夫人　そして、グラランド・バイロン・ホテルのボーイでしょ？

ジャック・ストロー　そうです。

パーカー嬢ジェニングズ夫人　そして、ポメラニアのセバスチャン大公なの？

ジャック・ストロー　そうです。

セルロ　まさか。

ジャック・ストロー　よろしければ、説明させていただきたい。四年前、わたしはどうかしようもないほどある女性と恋に落ちました。世界中のほかの誰よりも高く足をはね上げるのがその女性の得意技でした。彼女がとても優雅に男性の頭からシルクハットを蹴り落とせるので、わたしと結婚してくれるよう頼みました。祖父は承諾を拒み、あわててその女性を辺境の地へ追いやりました。「エセルをちらっと見て」当時、わたしはロマンスを追い求める人間だったので、彼女を追いかけましたが、彼女にはすでに正式な夫が三人ほどいたんです。その夫たちを見て、また、彼女の特技が家庭生活に大して幸福をもたらさないと確信して、わたしの熱情は治まりました。でも、世界がちよつとばかりうつろで空っぽに見えたので、生きていくのにウィットしか持っていない人間の立場から世界がどのように見えるのか見てみたいと思いました。やってみて、率直に言えることは、先祖の権力から生ずる税収で生きていく方がずっといいということです。あなた方がグラランド・バイロン・ホテルでわたしを見た時、わたしは家族の懐に戻る準備をしていましたが、この若い女性を見て、チャンスが提供されたので、ここに来ようと決めました。わたしが大げさな名前を装うように頼まれた時に、自分の名前を装うのは不自然ではありません。昨日、フォン・ブレマー伯爵に会った時、エセル・ジェニングズさんとわたしの結婚を承諾してくれるよう、皇帝に手紙を出してくれと頼んだんです。

フォン・ブレマー　皇帝は大好きな孫にまた会えることにお喜びで、喜んで承諾をお与えになったことを付け加えなければなりません。

パーカー嬢ジェニングズ夫人　この数時間、あたくしがあなた様に申し上げたすべてのことを考えますと……。

ジャック・ストロー　すべてボーイの耳から入りましたが、奥方、大公の耳からはすり抜けました。

ジャック・ストローはエセルのところへ近寄って行く。

ジャック・ストロー　さあ、これで、年老いた皇帝に安らぎを与え、八十一人の大公に満足を与え、あなたの卑しきしもべに幸福を与えるかどうかはあなただけにしかかかっていません。

エセル　わたしはセルロ卿と婚約しています。

パーカー嬢ジェニングズ夫人　何ですって！　そんなこと知らないわ。

ジャック・ストロー わたしたちのママが気に入らないのは分かります。

エセル 事実是不変わらないわ。

ジャック・ストロー さあ、君、絶好のチャンスだ。君にはただ一つの道しか開けていないことは実にはつきりしている。舞台の中央に立って、思いつくかぎりの感動的なセリフでこの女性との縁を切るんだ。

セルロ いいですか、あなた、あなたがわたしをからかい続けるやり方は実によくないと思います。

ジャック・ストロー セリフにはちよつと威厳を込めるんだ、君。

セルロ わたしは底抜けの馬鹿かもしれないませんが、あなたに言われなくても、エセルがあなたをやっつけたくなかったら、決してわたしを受け入れなかったらろうということくらい分かります。

ジャック・ストロー ああ、チャンスを投げ出す人間がいるとは！ 哀れを誘う調子で訴えるんだ、君、さもないと、おしまいだぞ。君が終わった時には、その場に涙一つ見せない目があつちやいけないんだ。

セルロ では、実を言いますと——今まですっかり忘れていましたが、わたしは今朝、ある女性の事務弁護士から手紙をもらって思い出しました——わたしはたまたまその若い女性と婚約していて、その人も男性のシルクハットを蹴り飛ばすことができるんです。

ジャック・ストロー おやまあ、同じ人じゃないか。

エセル どうして言ってくださらなかったの？

セルロ ええと、それは、ちよつと具合が悪かったもので、あの時あなたが——その……。

ジャック・ストロー 彼の頭に飛びかかりなさい。

エセル 「微笑みながらジャック・ストローに向かって」わたしがあなたにすごく腹を立てても当然ですわね。ずっとわたしのことを嘲笑ってらしたんですから。あなたがわたしのことを真剣にお考えになるなんて信じられませんわ。あなたがおっしゃったようにわたしが本当にロマンチックな人間だとしたら、わたしは堂々と、少しでもあなたと関係を持つのをお断りしますわ。

ジャック・ストロー でも、あらゆる女性のように、本当はとても分別がおありだから、そのようなことはなさらないでしょうね。

エセル それは、わたしに分別があるからではなくて、あなたがたつた今おっしゃったことで、あなたが全く正しいと思うからですわ。

ジャック・ストロー ありがたい！ わたしは床に身を投げ出して、あなたにわたしの上を歩くよう乞い願いたいところですが、あいにくわたしはあなたがわたしの言葉を額面通りに受け取ったと確信しているもので。

パーカー・ジェニングズ夫人 「非常に満足して」この方が大公だって、ずっと分かってましたわ。母親の目はごまかせませんもの。

ジャック・ストロー 「ぎくつとして」一度あなたに言っておかなければならないことが一つあります。ポメラニアはいくつかの点でまだ開けていない国です。

恐ろしい法律があつて、王族の人間が王族の血を引いていない外国人と結婚する場合、妻の親族は入国を禁じられるんです。

パークー||ジェニングズ夫人 あたくしが自分の娘に会いに行くのを禁じる人を見てみたいものだわ。

ジャック・ストロー ねえ奥方、これを言うのは非常に悲しいのですが、我が国の国境を越えるやいなや即座に打ち首にされるんです。

パークー||ジェニングズ夫人 本当に、閣下、開けていない国ですわね。

終わり